
魔法少女リリカルなのは StrikerS 天空を舞う自由の大天使

白銀の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 天空を舞う自由の
大天使

【Nコード】

N7242V

【作者名】

白銀の翼

【あらすじ】

メサイア攻防戦から一年、世界はカガリ・ユラ・アスハが治めるオーブ連合首長国、ラクス・クラインが治める”プラント”を筆頭に、少しずつ復興への道を進んでいた。

だが、その復興は余り進まなかった。

所属不明の艦隊が現れ、破壊行動を行っていたのだ。

そんな中、ザフト軍隊長兼特務隊”FAITH”に着任されたキラ・ヤマトは、所属不明の艦隊が海賊行動を行っていると聞き、調査に向かうが……………。

一方、ある魔法世界では、首謀者の名前がそのまま事件の名前になる程の大事件が起きようとしていた……………

プロローグ 自由が消失する時

”ユニウスセブン”落下による”ブレイク・ザ・ワールド”、ザフトと地球連合軍との第二次戦争、”プラント”最高評議会議長のギルバート・デュランダルが提示した”デステイニープラン”、そしてその”デステイニープラン”とデュランダルの暴走を止める宇宙要塞”メサイア”攻防戦から一年が経った。

あれから大きな戦争は起きていない。

だが、それでも世界の混乱は治まらなかった。

滅んだ筈の”ブルーコスモス”、”ロゴス”の残党かは定かではないが、所属不明の艦隊が、地球の国家と”プラント”を襲撃するというのが始まったのだ。

地球の国家は大西洋連邦以外の国は、それぞれザフトと連携を取り、艦隊を撃破。

大西洋連邦は大統領であるコーブランドが”レクイエム”によってアルザツヘル地球連合月面基地と軍諸共焼かれた為に、指揮系統はズタズタ。

地方都市や軍港、軍基地は壊滅状態になっていた。

デブリ帯

無数の岩塊や戦艦、モビルスーツの残骸が漂う無限に広がる漆黒の空間の中、一つの岩塊に一機のモビルスーツが身を潜めていた。

輝く白い四肢、黒と青のボディ、黄金に輝く関節部と両手と胸部砲口、両手に握ったビームライフル、灰色の砲身と何かの柄を腰部に装備、異教の神を思わせる四本のアンテナの装備した頭部、大天使を思わせる背中に抱く深蒼の八枚の翼。

身を潜めているにも関わらず、その姿は何か神の威厳を感じさせる。自由の名を持つ大天使^{アークエンジェル}「ZGMF-X20A」ストライクフリーダムガンダム”』である。

そのコックピットの中で、パイロットのキラ・ヤマトがメインカメラに写る何かを見ながら呟く。

「あれだけの数の、アガムムノン級……。
しかも、モビルスーツ部隊を展開している」

メインカメラ、つまり頭部にある目には灰色の戦艦が四隻展開し、またモビルスーツ、”ウィンダム”や”ダガーL”を無数に発進させているのが映る。

「地球軍じゃないとすると、”ロゴス”……。
だけど、”ロゴス”はもう……。
一体何処の所属なんだ？」

キラの呟きの通り、軍需複合組織”ロゴス”は、”ブルーコスモス”盟主ロード・ジブリールの死により滅んだ。

地球連合軍にしても、ザフトの放った”レクイエム”によりその戦力の九割を失い、今は正面まともに動く事すらままならない。

かと言って、自分が隊長と”フェイス”を勤めるザフトにもあのタイプの戦艦ふねはない。

つまり目の前にある艦隊は、所属不明だという事だ。

”エターナル”からはまだ連絡は無し……”

そして、その時が来た。

所属不明艦隊から発見、砲撃が放たれたのだ。

「っ！見つけた!!」

慌てて岩塊から離れるも、”ウィンダム”や”ダガール”のビームライフルや砲撃が放たれていく。

だが、気になる事が一つある。

「っ！？警告も無しに!？」

そう。警告や連絡もないのだ。

普通なら、攻撃する際に何か一言警告を入れる筈だがそれが一切ないのだ。

「くっ！」

問答無用か……！！」

それならばこっちも容赦はしない。

ザフトの一部隊の隊長として、”フェイス”として、一人の人間というキラ・ヤマトとして。

キラは機体を動かして高エネルギービームライフルを両手に握り、翼を広げ宇宙を翔けていく。

それぞれのモビルスーツ群の間を、白い閃光が走りながら対角線上に翡翠の光弾を無数に放つ。

放たれたビームは正確に、そして冷酷に一発ずつモビルスーツの動力部を貫き、破壊していく。

たじろぐ”ウイングダム”達だが、キラはグリップしていたビームライフルを腰に納め、抜き打ちにビームサーベルで胴体を真っ二つに斬る。

だが無論、所属不明モビルスーツ、艦隊も黙ってやられる訳ではない。

”ストライクフリーダム”に向けて無数のビームやミサイル、弾幕砲火を放つも、それらすべて泳ぐように躲かれてまた破壊されていく。

次々と所属不明機を破壊していく”ストライクフリーダム”。だが一瞬だけの静止を捉えて”ウイングダム”と”ダガーL”が四方八方を取り囲む。

キラはそのまま”ヴォワチュールリュミエール”の加速力で数隻の艦隊へと翔けていく。

艦隊は”ストライクフリーダム”の接近に怯えたように、無数の集中砲火を浴びせるが、掠っただけでモビルスーツ等を消滅させるビームの奔流を、”ストライクフリーダム”はまるで泳ぐように躲し、旗艦の船尾に腰部の”クスイフィアス3レール砲”を撃ち込ませ、炎の華を咲かせて動きを止める。

そして、それと同時に展開していたドラグーンを再び散らばらせ

「当たれええ！！」

深蒼の翼端はそれぞれ命を与えられたように、全くの別行動を取り、艦隊の砲塔やスラスタ^{ブリッジ}、艦橋を潰していき、全滅に追いやった。

ここまで、僅か一分。

キラは僅か一分で所属不明モビルスーツ部隊及び所属不明艦隊を全滅に追い込んだ。

「……………」

だが、コックピット内でのキラの表情は暗い。

初めてこの機体を操った時、”エターナル”を、愛する歌姫を、嘗て敵対していたが今は仲間の虎を、仲間を守る為に戦ったが、今はそうではない。

皆、それぞれがそれぞれの道を歩んでいる。

愛する”永遠”の歌姫は”プラント”最高評議会議長、”虎”は一般人として、”正義”の騎士である幼馴染みはオーブ軍の准将、”運命”の堕天使の友は自分と”衝撃”の恋人と同じザフトの”FAITH”、そして自分はザフトの隊長兼”FAITH”……。

皆それぞれ違う未来に歩みを進めていつている。

キラはそんな事を考える自分に軽く苦笑すると、”プラント”に戻り報告書を提出すべく、再び操縦桿を動かした。

が……

突然コックピットの中に警告音アラートが響き渡り、機体が何かに引っ張られ始めた。

「っ!!これはっ!?!」

キラは原因を見るべく、頭部のメインカメラを動かす。

そこに映ったのは、どんな星よりも強い光を放つ空間。

しかもその方向に機体が引っ張られていく。

「くうっ!?!」

何が何なのかは解らないが、キラはあの光を危険と判断し、背面のスラスタを全開にするが全く意味が無い。

それどころかお構いなしにどんどん引っ張られる。

そして、システムがどんどんダウンしていった。

ハッチも開かない、武装も使えない、スラスタも意味を成さない。

「うあああああつ！！！！！！」

為す術が無いまま、キラは専用機と共に光の中へと吸い込まれ、消えていった。

キラはMIA、ミッシング・イン・アクション戦闘中行方不明という事実上の『戦死』になった。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 天空を舞う自由の大天使

始まります

機動六課と大天使

「ん……うう……。

ここは……？」

光に飲み込まれて数分、キラは愛機の中で目を覚まし、周りを見てみた。

機体のシステムはあの光に吸い込まれる際に強制的にオフになったが、キラは起動出来るか確かめるべく、キーボードを出して操作してみた。

「CPG設定正常、ニューラルリンクエージ、イオン濃度正常、メタ運動野パラメータ正常、原子炉正常、オルウェポンスオールグリーン、パワーフロー正常、全システムオールグリーン……。良かった、”フリーダム”に異常は無い……。」

ふう、と溜息を吐くキラ。

次に今の状況だ。

キラは機体の電源を入れ、”ストライクフリーダム”を起動させる。

「Generation Unsubdued Nuclear
Drive Assault Module……。」

いつもと同じ、GUNDAMのOSが開き、頭部にある二つの目に光が灯り、カメラが起動された。

だが、そこに映ったのは、さっきまで自分がいた光景ではなかった。

「なっ!?!」

僕はさっきまでデブリ帯にいた筈なのに!?!」

キラの瞳とカメラに映るのは、宇宙の漆黒の空間ではなく、白銀の雪山が連なる地上だった。

だが、青空には無数の惑星みたいな星がある事から、地球ではないのが解る。

「ここは……地球じゃない……?」

あの光に飲み込まれて、何が……?」

今頭を捻りながらそれを考えても仕方が無い。

まずは人がいるかどうか調べたいが、機体はどうするか。

そう考えた矢先だった。

ピーピーピー!

「っ!?!」

再び響く警告音と向けられた殺意と敵意。

その殺意と敵意を受けたキラは、反射的にヴァリアブルフェイスソフトVP S装甲を展開し、跳躍した。

機体が宙に飛びながら白、青、黒、金に色付き、さっきまでにいた

空間を青白い光弾が切り裂く。

「敵!？」

撃ってきた源をカメラを駆使して見てみると、そこには楕円型の形をした機械が数機いた。

しかもそれぞれ自律行動を取りながら青白い光弾を放っている。

「あれは……一体？」

呟くキラだが、すぐに思考を戦闘に切り替える。

少なくともこちらに攻撃をしかけている以上、敵対行動と判断しても良いだろう。

キラは天空に飛び上がりながらも、両手に握ったビームライフルから無数のビームを放つ。

アンノウンは灼熱のビームにボディを数機溶解させられながらも”ストライクフリーダム”に向かう。

だがこの時、キラは大いに焦っていた。

さっきまで宇宙^{ソラ}で所属不明艦隊とモビルスーツ部隊を相手取り、更に何処か解らない世界で訳の解らないアンノウンと戦えばそれは焦るだろう。

そして、キラは普段の時には絶対に犯さない間違いを犯してしまった。

重力があるここで、ドラグーンを射出してしまったのだ。

「しまった！

このままじゃ、ドラグーンが！！」

ドラグーンが墜落する！

だが、キラの予測に反してドラグーンは目にも留まらぬ速さで縦横無尽に飛び回り、アンノウンを蒸発させていく。

「ドラグーンが墜落しない！？」

これなら　　！」

ドラグーンが何故重力がある中でも出来るのか、考えるのは後だ。

今は戦闘中で、他の考え方をするのは自殺行為だからだ。

「食らえええ！」

キラはドラグーンを操りながら、ビームライフルや腰部のクスイフイアス3レール砲、腹部の複相ビーム砲を駆使しながらアンノウンを撃退していくと、アンノウンは為す術もなく、全滅された。

”ストライクフリーダム”の翼にドラグーンが戻る。

「ここは、一体………？」

キラの呟きに答えるのは誰もいない。

だがあのアンノウンで解った事がある。

ここには人が住んでいて、しかもかなりの文明が発達している所だ。

— 先ず安心するキラ。

「取り敢えず、人を」

探そう、と続けようとした時だった。

キラの視界、メインカメラにある爆発が映ったのだ。

「ん？あれは　！？」

メインカメラに映った爆発をチェックすべく、その爆発をズームにした時、キラの顔が三度驚愕に彩られた。

カメラに映ったのはキラがさっきまでに屠った白と青の色を基調としたモビルスーツ、”ウインダム”が十機と黄金と桃色の光を纏い、更に手に持った杖と黄金の刀身を持った鎌のような長柄の武器から斬撃と砲撃を繰り返してる二人の女性。

「……………へ？」

思わず口から間抜けな声が出てしまう。

何処か解らない世界にC・Eの機動兵器の”ウインダム”がいるのにも驚いたが、それ以上に見た事も聞いた事の無い武器で戦っている女性にも驚いた。

「はっ!?!」

ブンブンと首を左右に振って思考を切り替える。

あの女性達は一步も退かずに戦っているが、放っている砲撃や斬撃は、”ウイングダム”の装甲に当たるも、全く通用しないのか弾き返される。

だが”ウイングダム”も無論、やられっぱなしではない。

手に持ったビームライフルやビームサーベルで反撃に出る。

女性達は躲すも灼熱の光なのでかなりオーバーな動きで躲す。

このままではやられるのも時間の問題だ。

ふと、一機の”ウイングダム”が二人に肉迫し、後ろに陣取っていたへりに迫り、ビームライフルをへりに向ける。

「っ!?!」

気付けば、キラの足はフットペダルを強く踏んでいた。

「止めるおおお!?!」

目にも留まらぬ速さで”ウイングダム”に迫りながらも、左のライフルから一発のビームを放つ。

放たれた光は、過たずにビームを放とうとしていたライフルに直撃、爆発を起こす。

「ええいつ!!!」

ライフルを腰に仕舞うと同時に、二本のビームサーベルを抜刀、ウインダムの胴体を錐揉みしながら真つ二つにして爆発させる。

そして、”ストライクフリーダム”はヘリの前で立ち塞がり、背中に抱く八枚の深蒼の翼を広げた。

その姿は、さながら地上の人間達に裁きを下す為に舞い降りてきた大天使のようだった……。

時は少し遡り、時空管理局古代遺失物処理管理部隊である機動六課は、ヴァイス・グランセニックの操るJF704式のヘリで今回の任務の最終確認をしていた。

今回の任務は、古代ベルカ自治区山岳地帯にて、ロストロギア”レリック”を積んだりニアレールがガジェットの襲撃に逢い、制御不能に陥ってしまった。

ガジェットを殲滅し、ニアレールに積まれている”レリック”を回収する、といういきなりハードな任務である。

ヘリが山岳地帯に来た。

これが意味するのは、初任務の時間が近いという事だ。

「ヴァイス君。私も出撃^でるよ。
フェイト隊長と一緒に空を抑える」

「了解つす！なのはさん！」

スターズ分隊を率いる隊長兼、戦技教官である高町なのはの出撃要請に、ヴァイスは不敵な笑みで答えると、ヘリの後部ハッチを開く。

「スターズ01、高町なのは、行きます！」

出撃合図を叫ぶと共に、なのははハッチから真つ逆さまに飛び降りながらもレイジングハートを起動、純白に青いライン、胸部に深紅のリボンを結んだドレスのようなバリアジャケットを展開すると脚に桃色の翼を出し、空を舞う。

途中でフェイトと合流し、空に展開していたガジェット航空型の殲滅にかかる。

後一段階、それは隊長二人が空を抑える間に、FW陣がレリックを回収するという内容だ。

「さ〜て新人共！
隊長さん達が空を抑えているお陰で、無事に出撃地点に到着したぞ！
準備は良いかあ！？」

「「「「はい！」「」「」」」」

「スターズ03、スバル・ナカジマ、行きます！」
「スターズ04、ティアナ・ランスター、行きます！」

FW陣の一人でスターズ分隊に所属するスバルとティアナは真つ逆さまに出撃、バリアジャケットを纏うとガジェットを破壊していった。

次はライトニングに所属する年少組のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエである。

エリオとキャロは後部ハッチに着くが、キャロが若干震えている。

まだ年少なのもあるが、キャロにはある心境があるからだ。

エリオはそれに気付いたのか、微笑みながらキャロに手を差し出す。

「……一緒に行くっ」

「……………うんっ」

たったそれだけで緊張が取れたのか、キャロは笑みを浮かべながら手を取る。

「うん。」

ライトニング03、エリオ・モンディアル、行きます！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエ、行きます！」

年少組も、ヘリから真つ逆さまに出撃しデバイスを起動、バリアジャケットを纏うと任務を始めた。

それから数分。

空とレール内のガジェットを掃討し、”レリック”を回収しようとした時だった。

「二時の方向より増援！

こゝ、これは……！？」

「どうしたの？シャーリー？」

「増援だったら私達が行くよ？」

ロングアーチの一人であるシャーリーことシャリオ・フィニーノの動揺に満ちた声に、二人は疑問の声を出す。

増援は解るが、どうかしたのか？

「増援の数、十！

識別、アンノウンです！！」

増援の数は十と少ないが、アンノウンとなれば話は別だ。

どんな強さか解らない敵は油断が出来ない。

恐らく隊長陣が相手取るだろう。

そして、『それ』が来た。

最初の『それ』は空に胡麻を塗したようなものだったが、段々近づいてくるに連れて『それ』の全貌が露わになってくる。

青と白を基調としたボディと四肢、頭部は二つの目がついたヘルメツトのような形状をしている。

左腕には青いシールドを、右手には黒いライフルを持ち、両腰には何かの柄らしきものを装備し、背中には飛行機のような翼をつけている。

二十メートルはある巨体。

そう、アンノウンとはモビルスーツ、”ウィンダム”だったのだ。

しかも数は十。

「っ！？」

「……FWの皆は急いでへりへ戻って！！」

「でもなのはさんとフェイトさんは、どうするんですか！？」

「私達はこのつらを破壊するから早く！」

「「「「は、はい……」」」」

指示を受けたFW陣は、全員パニックに陥りながらも、スバルの出したウイングロードで何とかヴァイスのヘリへ戻っていった。

「行くよ、なのは!」

「合点!」

「はあ、はあ……」

「ぜ、全然効かない……」

あれから数分後、なのは達は肩を大きく上下させながら息をしていた。

対して”ウイングダム”群は全くの無傷。

彼女達は当初、魔法の集中攻撃を浴びせて一機ずつ撃破していきこうと考えていた。

だが、結果は無惨なものだった。

”ウイングダム”の装甲の前に、魔法は一切集中しないのだ。

砲撃は楯と装甲で弾かれて、斬撃は装甲で跳ね返される。

しかも”ウインダム”群もただ黙ってやられている訳ではない。

ライフルから放つビームや、光の刃を振るい、反撃をするが、二人はそれを躲すものの、かなりの熱量を持っている為にかなりオーバーな動きで躲さなければならぬ。

しかも二人は魔力リミッターをかけているので、もう飛行魔法で浮いているのがやっとだった。

「この…ゼエ…質量兵器…ハア…どうなってるの!?!…ゼエ…」

「なのは…ハア…熱く…ゼエ…ならないで…必ず…ハア…勝機が…ゼエ…あるから……」

なのはを宥めるフェイトだが、彼女もそう思っていた。

この質量兵器に勝機なんて万に一つも無い。

破壊する、という考えそのものが甘かったかも知れない。

すぐに”レリック”を回収して、すぐに撤収すれば良かったかも知れない。

後悔に苛まれる二人。

だが、その二人に付け込んで、一機の”ウインダム”が肉迫し、ヘリにライフルの銃口を向けた。

「「っ!?!」」

一瞬、空気が凍り付き、二人の頭にあるビジョンが映る。

その銃口から放たれた灼熱の光が、へりごとFW陣の身体を焼き尽くしていくのを。

まだ年若いFW陣は、自分達に何が起きたのか、解らないまま死んでいく。

「くっ!」

「やらせない!」

二人は今出せる最高スピードで迫るが、酷く遅く感じる。

そして、その銃口からビームが発射されようとしたその時。

横から放たれた別のビームが、過たず”ウィングダム”のビームライフルの銃身を貫いた。

「……っ!?!」

「な……に……!?!」

ビームライフルが爆発し、光が二人の目を灼^やく。

そして横から迫った何かが、”ウィングダム”のボディをビームサーベルで胴体を真っ二つに斬り、破壊した。

大天使の舞い

アーケエンジェル
鋼鉄の大天使。

それが、なのは達を始めとした現場の魔導師、はやてを始めとした司令室の人間達の第一印象だ。

誰もがいきなり現れた大天使のような機体に唖然としていたが、機体から発せられた声で意識が戻された。

「こちらザフト軍ヤマト隊長兼最高評議会議長直属の特務隊”FAITH”所属、キラ・ヤマト！」

外部拡声スピーカーから発せられたであろうその声は、隊長陣と同じ年くらいの青年の声だ。

「援護します！今の内に撤退を！！」

一瞬、青年の声を聞いたなのは達はポカーンとした。

確かに今の彼女達は、未知の相手に苦戦している。

だがいきなり大天使のような別タイプの人型兵器が現れ、撤退を促すも、パイロットが言う『ザフト軍』、『ヤマト隊』、『最高評議会議長』、『直属の特務隊』、『FAITH』という聞き慣れない単語を言われても、はいそうですかと信じる事は出来ない。

「援護？撤退？

そんなの、出来る筈

」

「急いで下さい！
ヘリに乗っている人達を死なせたいんですか！？」

なのはからの反論に、中にいるであろうパイロットが被せた声で、
二人は絶句しかけた。

青年が言っているのは、さっきにあんな事があったのに、完全に失念してしまっていた事だった。

先程”ウィンダム”に肉薄されて、ヘリに乗っているFW陣が危うくなっただが、この機体の登場でそれが救われたのだ。

少しは信じよう。

頷くと、二人は”ストライクフリーダム”の方に顔を向けて叫んだ。

「解りました。

一時現空域から撤退します！」

「お任せします！」

「はい！」

パイロットの返事を聞くと同時に、二人は機体を摺り抜けてヘリに乗り込むと、ヘリのパイロットと話をつけたのか、空域から撤退していった。

その場に残った十機の”ウィンダム”と、一機の”ストライクフリーダム”だけ。

客観的に見ると圧倒的に劣勢だが、それは余りにも間違いだ。

なんせこれは、世界最強の一角を担うエースと、何処にでも造られている量産型の戦いなのだ。

「行くぞ……………っ！」

キラはコックピットの中で静かに、しかしそれでいて殺気に満ちた声で両手でビームライフルを握ると、真っ直ぐ”ウインダム”群に向かっていった。

機動六課 司令部。

「正体不明機、アンノウンと交戦！
は、速い！？」

「正体不明機、更にアンノウンと交戦し、撃墜！
残り六！」

「正体不明機、更に攻撃！
先は、アンノウン！
残り五機！」

「何、なんや……？」

あの機体……」

ロングアーチスタッフのメンバーである、アルトとルキノ、シャーリーが戦況を告げる中、機動六課部隊長の八神 はやてがポツリと呟く。

魔法が通用しない機体には、同様の機体をぶつけるのは効率的だが、はやての思いはそこではない。

あの大天使、キラ・ヤマトが操縦しているだろうあの機体は、光学映像の中で桜色の光刃や翡翠の光弾と黄金の実弾、真紅の熱線を縦横無尽に駆使するも、空気抵抗が存在するか疑わしい高域次元飛行をしながら撃破していく。

正直、人のレベルを超越した操縦技術だ。

はやては、自分の心にある欲望が渦巻いていたのに気付いていた。

（あの次元漂流者を保護した後、あの機体を取り上げて、データをデバイスとバリアジャケットに活かせれば……）

そうしたら、今後自分達があのような機体に立ち向かう事が出来る。だがそれはパイロットであるキラ・ヤマトに許可をもらわないと出来ないが、そこは上手く口車に乗せるか、勝手に機体データを盗むかの二つに一つのやり方だ。

端役と言えども、時空管理局の部隊の一つである機動六課の部隊長である彼女は、時に非人道な行為もやらされるが、当の本人はもう

慣れてしまったのか、将又そうではないのか定かではないが、何の抵抗も無くなっていた。

それが後に、大いなる災いを齎す事に気付かないまま。

「な、何!？」

翼が分離して攻撃した!？」

「あの光の翼が出てきたら、今度は更に加速!？」

アルトとルキノ、シャーリーが告げるのも聞こえないらしく、表情を変えないはやてに、部隊長補佐を任されている眼鏡の青年、グリフィス・ロウランが懸念の眼差しを向けていたが、はやては意識を戻さなかった。

山岳地帯、リニアレール近く。

リニアレールでのモビルスーツの戦いは、終局を迎えようとしていた。

十機いた”ウィンダム”群は、既に一機で、しかも満身創痍。

対して”ストライクフリーダム”は、一対十という圧倒的不利の中

でも全くの無傷である。

エネルギーにおいては、核エネルギーで動いている為に心配無用だ。

「さて……」

キラは両手のビームライフルを縦に連結させ、照準を向ける。

ビームライフル、バーストモードの構えだ。

対して”ウィングダム”も、唯一残された武装のビームライフルを”ストライクフリーダム”に向ける。

そして、連結されたライフルの銃口から、凄まじい光が迸ると同時に、細い光が迸り、真っ正面からぶつかった。

結果、バーストモードから発射されたビームは、細いビームを飲み込んでそのまま、ウィングダムの装甲に直撃。

瞬く間に機体を消滅させた。

「ふう……」

キラは軽く息を吐くと、ビームライフルを両腰に納め、頭部にあるメインカメラを動かして周りを見てみた。

撤退していったヘリコプターが、こっちに向かってきている。

彼女達が乗っているだろうがは解る、だが組織か何かに所属しているだろうが、どういふ組織か解らない。

ふと、その時。通信が入ってきた。

「こちら、時空管理局古代遺失物処理管理部隊長の八神 はやてと言います」

通信用のモニターに映ったのは、自分とそう変わらないくらいの年齢の女性。

茶髪のショートカットに、×（ペケ）型の髪飾りをしている、女性だ。

対してキラは偏光ガラスで造られたバイザーな為、顔は見えない。

「私の部隊の者を助けてくれた事に感謝します。

しかし、そちらの素性が解らない以上、こちらに従って貰います」

これにより、情報を手に入れられると、キラは少し喜びそうになったが、思い留まる。

時空管理局という組織がどんなものか、どのくらいの規模か、というものが解らない。

今の所解ると言えば、その時空管理局が、”ストライクフリーダム”を見逃す筈はない、それどころか技術や兵装データを盗もうとするぐらいか、この二つだ。

ハッキリ言って情報源としては信じられるが、その他については余り信じる事が出来ないと言った所だ。

正直、今のキラに出来る事と言えば……。

「解りました。そちらに従います」

相手に恭順する事くらいだった。

暫く経った後のヘリコプターの内部。

「わあ〜！

あれ凄いよティアー！

私達と一緒に飛んでるよ〜！！」

「凄い機体ですね〜！！」

スバルとエリオが並行飛行している、”ストライクフリーダム”を窓越しに見てはしゃいでいる。

ティアナとキャラも同じく見ているが、スバル達のようにはしゃいでいない。

キャラは興味半分、恐怖半分といった所で、ティアナは少し警戒しているといった所だ。

因みに、今彼女達が飛んでいる高度はかなり高い。

”ストライクフリーダム”のパイロットが、もし市街地があったら、
という事も考慮したのか、頼んできたからである。

”ストライクフリーダム”が質量兵器なのは間違いはないので、そ
れぞれと言えばそれまでだが、何とまあ個性的な人材である。

一方、隊長陣と現場指揮を取っていたリインフォース？（ツヴァイ）
はどうと……。

「……………」

「……………」

「……………（は、話し掛けづらいです〜！）」

ずーんと暗いオーラを出して落ち込んでいるのはとフェイトに戦
慄していた。

実際、彼女達が落ち込んでいる理由はリインには解っている。

フォワード陣を救ってくれた人物に対しての申し訳なさと、危うく
死なせてしまいそうになった自分達の甘い判断に対しての怒りだ。

さっき、リインは彼女達に自分を責めても何も生まれないと注意は
したが、それを上手く理解出来なかったようだ。

ヘリの中の彼女達と”ストライクフリーダム”を操る次元漂流者の
思惑はどんどん加速していく。
キラ・ヤマト

……。丁度、彼女達の居場所である、機動六課隊舎に向かうへりのように

相互解釈 大天使の覚悟（前書き）

うーん……。

久しぶりに書いたから良く解らないなあ……。

相互解釈 大天使の覚悟

数時間後

機動六課の隊舎敷地とヘリポートに、ゆっくりと”ストライクフリーダム”とヘリが着地した。

”ストライクフリーダム”は左膝を付ける形で、ヘリの脚部が地面に着くと同時に後部ハッチが開き、フォワード陣と隊長陣が出て来た。

その様子をコックピットで見ていたキラは、思わず啞然としてしまった。

なん、出て来た中の四人　フォワード陣　は余りにも若すぎるからだ。

二人は十六歳か十五歳。後の二人はかなり若く、十歳か九歳くらいだ。

「何故、子供まで……？」

乾いた声が口から響くと同時に、キラの心の中に物凄く熱くて暗い感情が出て来た。

怒り。あんな小さな子供達までも平然と戦場、しかも最も危険な最前線に送り出して、大人達は最後列でただ命令を出しているだけという怒りだ。

そして、それを容認しまた平然と行わせる、時空管理局そのものに対しての怒りでもある。

速くも、キラの心の中に時空管理局に対する不信感が募ってきた。

「おらっ！」

いつまでも籠ってないでとっとと出て来やがれ！！」

「ちよっ、ヴィータ！」

「……はっ！？」

いきなり外部からの暴言に、キラは思考の海から引き上げられる。

カメラを見てみると、ヴィータと呼ばれた小さな赤い髪をした少女が身体に似合わないハンマーを振り回して暴れており、はやてとかいった女性に羽交い締めになっている。

短気な性格らしい。

（仕方ない……。急ごう）

キラは横からキーボードを出し、素早くキータイピングをしていく。

キラが出した抵抗は、機体を時空管理局にいじくられないように何重にもプロテクトロックを掛ける事だった。

しかもこのロック、一つ一つの解析がコーディネイターでも解析するにもかなり時間が掛かるように難しく設定されている。

「これで、よし……」

細い人差し指がEnterキーを叩いて、「プロテクト、完全ロック完了」と映る。

これで、”ストライクフリーダム”はキラにしかいじくる事が出来なくなった。

後は機体の電源を切り、外に出るだけ。

VPS装甲のスイッチを切った時に、何やら外からどよめきが聞こえたが、華麗にスルーである。

胸部上部にあるハッチを開いて、外に出るとラダーワイヤーでゆっくり降りると、それぞれ武器を構える音が聞こえる。

敵意がビバシとキラの一身に当たるも、キラは気にせず歩み寄り、ゆっくりと被っていたヘルメットを取った。

ヘルメットを取った事で、キラの素顔が露わになると、今度はその場にいた全員が驚愕に彩られた。

キラの容姿にである。

キラの容姿は、艶やかな茶髪のショートシャギーに、全員の心を見通せるくらいに澄み切ったアメジストの瞳、パイロットスーツ越しだが、細いもガツチリとした肉体、健康的な褐色の肌。

女性から見れば、理想的な男性を絵に描いたような容姿なのだ。

そして、キラははやての前で立ち止まり、ザフト式の敬礼を取る。

「自分はザフト軍ヤマト隊隊長兼最高評議会議長直属の特務隊”フ
エイス”所属のキラ・ヤマトと言います」

慌ててヴィータを降ろすと、はやても敬礼を返す。

「先程もおっしやいましたが、私は時空管理局古代遺失物処理管理
部機動六課部隊長、八神 はやてと言います」

機動六課ブリーフィングルーム

その後、キラは一般隊士に案内させられて、パイロットスーツのま
ま一つの椅子に腰を降ろしている。

”ストライクフリーダム”は、未だに回収して貰っていない。

眼鏡をかけた長い茶髪の女性が、何やらグヘッと気持ち悪い笑み
を浮かべながら近付いていったのを見たが、軽々しくスルーである。

おもむろにキラの視界に、ある一冊のパンフレットが映る。

そのパンフレットを手に取り、目を通して見た。

自分の知っている英文に似ているが、何処か形が変な文字だ。

だが、キラは驚かなかった。

ただ変な文字、と思っただけである。

ある程度目を通して、パンフレットを置いたキラは、これからの事について考えた。

時空管理局という組織は、必ずといって良い程自分と”ストライクフリーダム”についてを調べるだろう。

正直言つて、管理局はあんなに幼い子供達までも平然と戦場に送り出す程の組織だ。

またそれから見るに、かなりの人員不足と解るが、それでも許せない。

そんな組織に自分の剣つるぎである”ストライクフリーダム”を渡されるとどうなるか、想像するに容易い。

技術や武装、その他全てを盗んで後は要らないと捨てるだろう。

プロテクトロックはかなり強固に設定してあるが、それでも保証は出来ない。

絶対に管理局には渡さない、とキラは心に決めた時だった。

プシューと自動ドアが開き、誰かが入ってきた。

栗色の髪をサイドテールに結び、時空管理局の制服だろう茶色の制服を着た女性、膝下辺りまで伸ばした金髪を黒いリボンで結び、黒いが同型の制服を着た女性、そして八神 はやてだ。

そして彼女達に続く形で長い桜色の髪をポニーテールに結んだ長身の女性と、赤い髪を三つ編みに結んだ少女が入ってきた。

（あの少女について背の事は言わないでおこ……）

「すみません。遅くなりました」

「いえ。大丈夫です」

「ほんなら、自己紹介と行きますか。」

私は先程も言いましたが、改めて八神 はやてと言います」

「私はスターズ分隊長兼戦技教官の高町なのはです」

「ライトニング分隊長兼執務官のフェイト・T・ハラOWNです」

「ライトニング分隊長のシグナムだ」

「あたしはスターズ分隊長のヴィータだ」

「先程も言いましたが、キラ・ヤマトと言います」

探りを入れるような挨拶の仕方に悟ったのか、キラは何も捉える事が出来ないような態度で答える。

だが、何処か会話の仕方では違和感がある。

特に部隊長の八神 はやてが。

「あの、出来れば普通の会話の仕方ですよ……」

「あ、そうなん？」

嫌々、これ結構疲れるんよ……」

はやてに習うように、隊長陣は肩を落とすも、副隊長の二人はキラを警戒している。

「そうそう。キラ君、あの機体やけどな、暫く本局の方で預からして貰うで」

いきなり来たはやての欲望という名のお願ひ。

なのはやフェイト、シグナムとヴィータも期待の眼差しでキラを見る。

シグナムとヴィータに至っては、次元漂流者が主の命令に従うのは当然、というような眼差しだ。

だが、キラの答は彼女達の想像を覆していた。

「データを取りたいとおっしゃるのなら、お断りして僕はここを離れます」

皆、驚愕と戸惑いの表情を見せる。

そしてそれは、シグナムとヴィータ二人の強い怒りに変わった。

「貴様っ！」

主の命令に背くというのか!?

貴様は私達の言ってる事をただ聞いていれば良いのだ!！」

「次元漂流者の分際で、あたし等の言ってる事が聞けねえってのか!?!」

我が儘も大概にしろ!！」

「ふ、二人共!抑えてや!」

はやてが慌ててデバイスを構える二人を抑える。

キラは知らないが、シグナムとヴィータははやてに仕えるヴォルケンリッター守護騎士。

主の命令は絶対というのが彼女達にとっての基本なのだ。

だが、その怒りはキラが次に出した答で今度は収まった。

「力尽くで奪おうとされるのなら……敵対してでも守ります……」

「……キラ君」

はやては気を飲まれて呟く。

「あれを託された、僕の責任です」

キラの表情に現れた決意を見て、シグナムとヴィータの中にある怒りが急速に冷めていく。

自分に託された力の重みや責任、それら全部引っくりかえり、気付い

ていてまた知っている。

だが、これは彼女達には無いものだった。

「……解った。

機体には一切、手を触れへん事を約束する。

なのはちゃん、フェイトちゃん、シグナム、ヴィータ、それでええな？」

「うん」

「解った」

「了解しました」

「ああ」

どうやら、一時的に機体の方の安全は保証されたようだ。

キラはホッとした顔になる。

「ありがとうございます……」

「ええよ。

さて、キラ君。

さっきヴィータが言ったようにキラ君の立場は次元漂流者、という事になつとるんよ」

「次元漂流者、ですか？」

「そう。」

ここ魔法世界のミッドチルダには、次元震と呼ばれる自然災害とかで飛ばされたりする人が稀に来るの。その人を次元漂流者って言って、元の世界を探して戻すのも管理局の仕事なんだよ」

フェイトの説明に、ふむと頷くキラ。

キラの今の立場は世界レベルの迷子だ。

そして同時に立場が弱い。

「そいでな。」

キラ君の世界の特徴というのを大まかに教えて欲しいんよ」

「解りました。では……」

キラは息を一つ吐くと説明を始めた。

C・E・（コズミック・イラ）と呼ばれる年代の地球、モビルスーツ、コロニー、等について、解りやすく簡単に。

「キラは平行世界の出身なんだね……」

平行世界。

一言で言えばパラレルワールド。

簡単に説明すると、もしもこうなったらの世界だ。

「パラレルワールドへの干渉は正直今の管理局の技術じゃ難しい…
…。
って、ヤマトは余り驚いてないな」

「ええ。」

もしかしたら、すぐには帰れないんじゃないかと思ってましたから
そうか、と頷くシグナム。

「すいませんが、時空管理局という組織について教えて欲しいので
すが……」

「ああ、うん。良いよ」

今度は五人全員からの説明が始まった。

時空管理局、というのはここ、ミッドチルダを中心に無数にある次
元世界の統括、管理、治安維持を主任務として行う、軍隊と警察、
更に裁判所の三つが一つに纏まった巨大な複合組織だ。

一見正しい事をやっているように聞こえる。

だが、それは実際に正しい事なのだろうか。

権力を象徴する三つが一つになった組織が、裏でどんな事をやるの
か想像する事は容易い。

裁判所がある時点で、自分達に取っては都合の悪い事を闇に葬り、
一般市民には一切知らせない事が出来てしまう。

基本管理局は、管理外世界には干渉しないが、それを抜きにしても強大な戦力を持っている。

だがそれよりも恐るべき点はロストロギアについてだ。

ロストロギアは、その世界の過去、オーバーテクノロジーで作られた危険なものと断定され、管理局が管理する対象として回収されている。

それは、ただ強力な力を一点に集めている、という風にも捉えられる。

もしロストロギアを管理する部署が反旗を翻したら、それだけでも驚異になりうる。

そして更に恐ろしいのは、はやて達がそれを正しいと盲目的に信じているという所である。

今ここでそれが本当に正しいのか、と注意したとしても、はやて達はそれをただ聞き流すか心の隅っこに置くかだ。

「……ヤマト？ヤマト」

「え？はい」

「さつきからしかめっつらをしていたが、大丈夫か？」

シグナムが言うには、どうやら考えている間に表情を変えたりしていたらしい。

「あ、はい。大丈夫です」

「本当にそうなん？」

「そんじゃ、今から隊舎の案内するから。」

「フェイトちゃん。私らは仕事と訓練があるけど、頼めるな？」

「うん。」

「お安い御用だよ」

「お願いします。ハラオウンさん」

立ち上がり、軽く頭を下げるキラにフェイトは苦笑しながらキラの額にちよいつと人差し指を付ける。

「フェイト。フェイトで良いよ。」

「皆そう呼んでるし」

「じゃあ、改めて。」

「よろしくお願いします。」

「フェイトさん」

「うん。」

「じゃあ、行こう」

「はい」

キラはフェイトに続く形でブリーフィングルームから出て行った。

相互解釈 大天使の覚悟（後書き）

ヤバ……。

今度はGENJI 神威奏乱とリリカルなのはのクロスが……。書いたら書いたで更に更新が遅くなるしなあ……。

怒りと新たなる力

キラが保護された時と同時時間の、とある研究所

薄暗くて広い空間に、二人の男女があるモニターを食いつくように見ていた。

首まで伸びた紫色の髪に鋭い目つきに黄金の瞳、紺色のスーツに純白の白衣を着た、長身の男性。

広域次元犯罪者として名を轟かせる科学者、ジェイル・スカリエツティである。

肩甲骨辺りまで伸ばした同じ紫色の髪に、同じ金色の瞳、白い服と青いタイトスカートを着た女性。

そのスカリエツティによつて『創られた』戦闘機人”ナンバーズ”の1、ウーノである。

二人が見ているモニターに映っているのは、リニアレール上でガジェット群と戦う機動六課の若き魔導師、騎士達だ。

ガジェット達は魔導師、騎士達により次々と破壊されていくが、彼等の視線は変わらない。

寧ろガジェットというガラクタなんかよりも、もっと価値のあるのが来るのを待っている。

そんな目だ。

そして、ガジェットを全て撃破して、これからレリックを奪取されようとした時、それが来た。

最初、それは空に塗まぶした胡麻のようだったが、時間が経つに連れてどンドン姿が解とけてくる。

白と青を基調とした装甲、左腕に巨大な青い盾、右腕に黒いビームライフルを装備し、背中には飛行機のような銀翼を広げている。

協力者がこの世界の技術を応用し、ある世界から持って来たと言われる人型機動兵器、モビルスーツの”ウイングダム”である。

驚いた機動六課のメンバーは、”レリック”奪取を一時中断してフオワード陣をへりへ撤退させ、隊長陣のみで”ウイングダム”に立ち向かっていった。

機動六課の隊長陣は、時空管理局でも屈指のエキスだが、相手がそれでもスカリエッティとウーノの顔は変わらない。

理由はただ一つ。

それは……。

「やはり、彼が言った通り、モビルスーツの装甲には魔法は一切通用しないか……」

そう、魔導師の魔法が一切合切通用しないのだ。

当たったとしても、戦車に豆鉄砲を当てたような光景になる。

まあ、簡単に言えば跳ね返されて何処かの彼方に消え去るという意味だ。

「ふむ、試運転の方は良いか……」

後は”レリック”回収を即座に行うようプログラムを

施そう、と映像を見ながら続けようとしたスカリエッティだが、次に映像に映ったのを見て絶句した。

へりに肉薄した一機の持つビームライフルが何者かによって破壊、更に両手に持ったビームサーベルでその”ウイングダム”を破壊したのだ。

「っつ!?!」

その破壊をやった張本人を見て、二人は目を剥いた。

輝く純白の四肢、黒と青のツートンカラーのボディーに、黄金の関節部と両手、腰部にレール砲と二挺のビームライフルを装備、更に背中に抱く八枚の深蒼の翼。

神話か何かのお伽話に出てくる大天使を機械的にしたような機体、

”ストライクフリーダム”の介入だ。

その後、”ストライクフリーダム”は機動六課に撤退させ、自分は両手にライフルを構えてスカリエッティが出撃させたモビルスーツに向けて真っ直ぐ飛翔していった。

余りにも華麗な戦いという名の破壊に、スカリエッティとウーノは

その白い機体に凝視していた。

「凄い……」

「ええ……。認めたくありませんが……」

つい二人の口から声が出る。

「あの機体、彼なら解るかな……？」

スカリエツティは、どうやらあの華麗に舞う白い大天使、”ストライクフリーダム”に興味を示したらしい。

ふと、彼はスクリーンから目を離し、何処かに通信を始めた。

場所は再び機動六課隊舎に移る。

「じゃあ、今からリンカーコアって言う魔力の核があるかどうか探すから、まずパイロットスーツを脱いで」

「はい」

フェイトにより案内されたキラは、機動六課の医務室にて、主任医師であるシャマルにより魔力検査を受けていた。

魔力があつてこそ、ようやくデバイスを起動させたりバリアジャケットを纏ったりする事が出来るらしい。

ぶつちやけて言えば、それは魔力の無い人物は戦力として数えない、と聞こえるのは気のせいだろう。

更に魔力があれば愛機は……。

「それじゃ、上半身だけ脱ぎますので少々待って下さい」

言うや否やキラはパイロットスーツのファスナーを降ろし、腕を出してはアンダーウェアを着た上半身を曝け出す。

キラの鍛え上げられた上半身、詰まりアンダーウェアから見える胸元を見たフェイトとシャルルが赤くなるも、それは華麗にスルーである。

「じ、じゃあ、始めるわよ」

「はい」

顔が赤いままシャルルはキラの堅い胸元に手を翳す。

(うーん……。

何だろう……。

大きくて堅い何かに守られてて良く解らないわ……。

魔力もなさそうだし……)

「シャルルさん？」

「あ、ごめんなさい。」

キラ君の中にリンカーコアは無かったわ」

「……………そうですか」

何かホツとした様な声で答えながらパイロットスーツのファスナーを上げるキラに、微笑むシャマルとフェイト。

「あ、それからフェイトちゃんは少し此処に残って」

「え？どうしてなの？シャマル」

「良いから。」

キラ君、ちょっと悪いけど廊下で待っていてくれないかしら？」

「……………はい」

キラは僅かに眉を潜めつつ軽く頷くと、そのまま椅子から立ち上がり、ヘルメットを持ったまま医務室から出ていくと、フェイトが入れ代わりにキラの椅子に腰を降ろす。

「シャマル？どうかしたの？」

「うん。」

キラ君の魔力の事だけどね」

「キラの魔力？」

「そう。」

キラ君のリンカーコアだけど、何か大きくて堅い何かに守られて全然解らなかったの」

シャマルから告げられた事実、フェイトは驚きを隠せない。

なんせこれまでにそういつた前提は無かったからだ。

しかも今の今まで魔法とは何の関係の無かった世界の住人であるキラが、だ。

「そんな……。」

じゃあさっきのは……?」

「今は解らないけど後で解る事になるわね……」

フェイトとシャマルはそのまま暫く密議を続けていった。

キラは医務室傍にある壁に身を預け、フェイトを待っていた。

頭に思い浮かぶのは、微かながらも中から聞こえてきたフェイトとシャマルの密議。

大きくて堅い何かに守られて全然解らなかった。

その守っているのは確証は無いが、自分の中にある一つの力。

日本語で”種”と直訳出来るものかも知れない。

「まだ解らないけど、いつの日にか、か……………」

解らないのは自分だけじゃない。

機動六課も解らない。

機動六課を始めとした時空管理局に知られば、まず間違いなく愛機である”ストライクフリーダム”は質量兵器として捨てられ、また管理局の戦力に数えられるだろう。

慢性的な人員不足とはいえ、管理局の傘下に入り利用されるのも、また剣を捨てられるのもまた御免だ。

そうなればたった一人でも戦う事になるだろう。

そう決めたキラの耳に、優しげな声が入る。

「お待たせ、キラ」

「フェイトさん」

キラの視界に入ったのは、輝く金髪に優しげに深紅の瞳に、黒い制服を着用し微笑みを浮かべた女性、フェイトだ。

「じゃあ、案内するからついて来て」

「はい」

今は考えても解らない、そう悟ったキラはそのままフェイトについて行った。

機動六課訓練所近く

訓練所近くの森林には、ヘリパイロットのヴァイス・グランセニツクを始めとした整備陣、メカニック陣の一人シャリオ・フィニーノ（以下シャリー）、更にティアナ・ランスターを始めとしたFW陣があるものを見上げていた。

FW陣の内二人は興味津々に見ているが、後の二人は少々の恐怖を染めた目で見ている。

あるもの。

鉄灰色となり、片膝を地面に付けたまま停止している”ストライクフリーダム”である。

シャリオが何やらグヘへと厭らしい笑みを浮かべながら装甲の表面に触っているが、軽くスルーである。

「皆ー！」

聞き覚えのある声に、その場にいた全員が後ろを向く。

その場にフェイトが金髪を、見覚えのある青年が茶髪を靡かせなが

らやって来た。

「フエ
」

バビューン！とティアナの横を何か茶色の影が物凄い速さで通り過ぎた。

その茶色の影とは

「あの！貴方があの機体のパイロットさんのキラ・ヤマトさんですね！？

私はシャリオ・フィニーノと言います！！

シャーリーって呼んで下さい！！」

「え？ええ、まあ……。」

よろしくお願いします、シャーリーさん……。」

「見てみましたが凄い機体ですよ！

あ、コックピットの中は見てませんから大丈夫です！」

「ええ、ありがとうございます……。」

いきなりハイテンションなシャーリーにキラはたじたじになりながらも律儀に礼を言ったりしながら答えていく。

「……この人いつもこんな感じなんですか……？」

「あはは、うん……。」

シャーリーの辞書に人見知りの文字は無いからね……。」

シャーリー、そろそろ離れないとキラ困ってるよ」

「はい」

フェイトからの注意により、余り悪く思っていないのかあっさりと離れて、代わりにFW陣がキラの前にやって来る。

「さ、皆。

キラに挨拶して」

「はい！

スターズ分隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士です！」

「同じくスターズ分隊所属のティアナ・ランスター二等陸士です」

「僕はライトニング分隊所属のエリオ・モンディアル三等陸士です！」

「わ、私は……、同じくライトニング分隊所属のキャロル・ルシエです」

「あ、俺はロングアーチスタッフであり、ヘリパイロットのヴァイス・グランセニック陸曹だ。
よろしくな」

「知っていると思いますが、ザフト軍ヤマト隊隊長兼国家元首最高評議会直属の特務隊”フェイス”所属のキラ・ヤマトです」

敬礼しながら挨拶するFW陣やヴァイスに、キラもザフト式の敬礼をしながら穏やかに挨拶を返す。

だが、その心中は顔と全く正反対に穏やかでは無かった。

理由としては、FW陣の年齢。

六課こくに来た時にコックピットから見たが、スターズ組のスバルとティアナは見た目から見て十五、六歳だが問題はそこでは無い。

問題はエリオとキャロの年齢だ。

見た目から見て、まだ九、十歳前後だ。

ふと、キラの脳裏にはやてが言った一つのある単語が思い浮かぶ。

『非殺傷設定』

どんなに相手を魔法で傷付けようとも、絶対に死なせる事が無い設定だ。

この設定なら、相手を気絶させて即逮捕する事が出来るが、それは逆に言わせれば魔法でなければ、また急所等に直撃すれば効力を発揮出来ない、または間接的に殺す所だ。

例えば、とてつもない程の高度で行われた空戦で砲撃魔法もしくは格闘魔法で気絶させれば、地面に向けて真つ逆さまに落ち、運が良ければ骨折、悪ければ頭を強打して死亡する。

拘束魔法バインドをすれば良いが、攻撃が仕掛けた本人がそれをするとは限らない。

また、こっちが非殺傷設定で行ったとしても、相手が必ずしも非殺傷設定を守るとは考え難い。

こっちが年少で、相手がベテランな次元犯罪者とすれば、『こっちは年少です。非殺傷設定にしてください』と言えばどうなるかは目に見えている。

瞬く間に殺されるのがオチだ。

メカニックのシャーリーもまた、その非殺傷設定に隠された恐ろしさに気付いていない。

ヴァイスの場合は気付いている為に論外だ。

「そういえば、キラ」

「ん？何でしょうか？」

考えている時に、ヴァイスが聞いてきた為に思考を中断させる。

「さっきお前が言ったザフト軍とか、『フェイス』とかってのは何なんだ？」

「……………」

予想通りの質問。

これまでに時空管理局の存在を知らなかったから、向こうもザフトの存在を知らないのもまた然りだ。

黙っていれば怪しまれるだろうから、キラは簡単に答えようと判断し、答えた。

「Z・A・F・T。
Zodiac Alliance of Freedom Treaty、詰まり自由条約黄道同盟という政治結社ではありますが、事実上は”プラント”という国家が所有する義勇軍です。
”フェイス”は国防委員会及び最高評議会直属の指揮下に置かれる特務隊で、『個々において行動の自由を持ち、その権限は通常の部隊指揮官より上位で作戦の立案及び実行の命令権限までも有している』という権限です。

しかし、国防委員会及び国家元首最高評議会議長に戦績、人格ともに優れていると認められた、というのが最低条件の義勇軍の為に階級の無いザフトに取っては將軍職に値する所です」

「そ、そんな凄い権限を持っているの(のか)!？」

キラからの答えにヴァイスとフェイトが驚愕に染まった声を出す。

FWはキラの答えとフェイトの驚き様を見て、目の前にいるキラは時空管理局と同等、否それ以上の権限を持っているという事が理解出来たらしく、目を見開いている。

その気持ちを読み取ったキラは、苦笑を浮かべる。

「あ、でも気にせず話し掛けて欲しいな。

ザフトは今ここには無いし、階級を通して見られるのも嫌だし」

「……はい!」「」「」

勇壮な返事を返すFW陣に、キラは柔らかな笑み(顔だけ)を見せ、機能停止している自分の機体を見遣る。

「そういえば、キラ。
キラの機体の名前、何て言うの？」

「え？」

「ほら、ここにいる内だけど、いつまでもこの機体とか言う訳には行かないから」

キラは身体を柔らかな笑みを浮かべるフェイトに向けて、真紅の瞳を真っ直ぐ見てみた。

フェイトの目は裏表の無い。

嘘を付いたり利用するように見えない。

これなら少しだが信じて見よう。

「ZGMF-X20A ストライクフリーダム」です」

「ストライクフリーダム」……………。

「ミスマッチしてるけど良い機体の名前だね」

攻撃と自由。

一見ミスマッチにも見えるが、キラが振るった二振りの剣の名前と、愛する女性むすめの祈りが籠められた機体。

フェイトはそれを感じ取ったのか、または上辺だけなのかは定かではないが、笑みを浮かべたまま頷く。

「あの、フェイトさん。」

”すたらいく、ふりーだむ”ってどういう意味なんですか？」

今まで入らなかったシャーリーが、フェイトの様子を見て首を傾げる。

やはり世界が違つと言語も違つらしい。

「ああ、”ストライクフリーダム”って言うのは攻撃と自由って言う意味だよ」

はあ、と頷く全員。

ふと、キラはFW陣の方を向く。

言おうとした事を言う為である。

「思ったけど、君達も戦っているの？」

その声に、ある願望が籠っていた事にキラは気付いていた。

出来れば答えないで欲しい。

戦っている、なんて言わないで欲しい。

言ってしまうえば、過去の自分を見ているような気がした。

だが、FW陣はそれを見事に打ち破った。

「」「」「はい！」「」「」

勇壮な返事。

だが、それは戦うという意味を芯から理解していないという風にも、自分の思いを敵に押し付けているようにも聞こえる。

「……………そう」

キラは笑みを消して軽く頷くと、皆に背中を向けて足早に去っていった。

「あ、キラ待って!」

フェイトもキラと同じように、キラの背中を追っていった。

「どうしたんだろう?キラさん」

「……………さあ?」

「一体どうしたんでしょう?」

「解らん……………」

さて、俺は仕事に戻るから、もうそろそろ準備運動しときな」

「キラ！」

二階廊下、しかも窓から”ストライクフリーダム”の胸部が見える所でキラは脚を止めた。

周囲に人影や気配は無い。

キラは振り返らず、フェイトに背中を向けたままだ。

「キラ、ねえどうしたの？」

あの子達が何か悪い事でも言った？」

「フェイトさん。」

いくつか質問があります。

あの小さな二人は、何故戦っているんですか？」

「え？」

いきなりの質問に、キョトンとしたフェイトだが、すぐに気を取り直す。

「何故って、エリオとキャロは人並みに戦えるけど？」

「っ！！」

何気なく放った一言だが、それはキラの逆鱗に触れるのには充分過ぎた。

キラがした質問を、フェイトは間違っ理解してしまったのだ。

戦場に子供を出す理由を聞いたのに、それを邪魔だと理解したのだ。キラはゆっくりとフェイトの方を向くが、その瞳には言いよつた無
い程の殺気が漲っており、身体には心臓を押し潰す程の重圧を纏っ
ている。

普段のキラじゃなく、特務隊フェイスに任命された軍人となつたキラだ。

実際フェイトはその重圧と殺気、怒気を買つ正面から受けて、冷や
汗ダラダラで倒れる一歩手前にまで陥っている。

「後幾つか質問です。」

何故貴女方大人がいるのに子供を戦場に向かわせているのですか？
それと、子供を最前線にやって、何も思わないのですか？」

キラの脳裏に浮かぶのは、極初めに”ストライク”を駆つた頃ア
クエンジェルの中にコーディネイターとしての自分がいた時の光景。
向けられた銃口、コーディネイターだからと向けられた冷酷な目。

憎しみ合い、撃ち合つていく者達。

真空の海に散つていく数知れない命。

自分自身が散らした命。

憎しみが憎しみを呼び、増幅、循環していく。

そしてその先にあるのは、嘗ての”第二次ヤキン・ドゥー工攻防戦”
”の様にお互いを滅ぼす程の泥沼。

その負の連鎖に、あのような子供達までも巻き込もうと言うのか？
正義をやっている時空管理局と言ったが、どこにそのような正義がある？

これを聞いたのが”無限大の正義”を体言する機体を操る友なら、まず間違いなくそれはただの偽物と言い切り、”運命”を体言した機体を操り、またその運命に翻弄された友なら間違いなく管理局との戦争になっただろう。

今ここにいない事に、キラは内心安堵の息を吐いた。

「キラに、何が解るの？」

「……………え？」

キラの殺気と重圧の中で、漸くフェイトが声を出す。

声に滲むのは、怒りと悲しみ。

「キラに何が解るの！？

あの子達の悲しみも知らない癖に！

あの子達の事を何も知らない癖に、勝手な事ばかり言わないで！！」

フェイトの脳裏に浮かぶのはオリジナルのコピーと呼ばれ、いとも容易く両親から突き放されたエリオと、強すぎる力の所為で竜の集落から追い出されたキャロ。

人間不信となってしまうた二人の嘆きとその時の目。

二人の事を、何も知らないキラに、そこまで言われたのに無性に怒りが渦巻いた。

だが、フェイトの怒りをキラは極めて冷静に返す。

「それと、一体何の関係があるんですか？」

「え……………？」

「戦う事に、一体どんな関係があるんですか？」

戦場という場所で死ぬかも知れないのに、何故悲しみや過去が出て来るんですか？」

「で、でも！」

「本当に大切に思っているなら、何故戦う事に何の抵抗も示さなかったんですか？」

平凡に、平和に生きる術も沢山あった筈なのに」

それを聞いたフェイトの怒りが根元からバキツ！と折れる。

平和に生きる事も出来た筈なのに、何故戦う道を選ばせてしまった？

何故その事に何の抵抗も、反対もしなかった？

悩むフェイトに、キラは情け容赦無く追撃をする。

「確かにどういう過去を持ち潜ってきたのか、僕は知りません。

でも、フェイトさんはただ自分と同じ境遇の人に同情しただけなん

「じゃないですか？」

「……………っ!？」

今度こそ、フェイトは息を呑む。

自分の過去については一言も喋ってはいない筈なのに。

が、キラはフェイトの過去を知っていない。

本当に、ただ心から言っただけである。

「……………失礼しました。

では、僕は」

「……………キラ。

貴方は一体、何者なの？」

「ただの、一人の人間です。

軍人ではなく、ただのキラ・ヤマトという人間です」

重圧、殺気全てを消し普段のキラに戻ると、またフェイトから離れていく。

フェイトはそれを追いかけてようとはしない。

脳や意志がキラについて行きたいと言うが、身体が動かない。言う事を聞かない。

「キラ……………」。

貴方は本当に、何者なの………?」

キラの背中が完全に見えなくなるが、フェイトはまだその場に突っ立っていた。

機動六課部隊長室

部隊長室にあるオフィスではやてがある命令書と睨めっこをしていた。

その命令書は　　。

先頃、貴官の部隊である機動六課に保護された次元漂流者を、その質量兵器ごと地上本部に來させるべし。

と書かれていた。

ここまでならまだ大丈夫。

だが問題はそこじゃなかった。

その命令書を送ってきた人物　　。

首都クラナガン防衛長官兼地上本部総司令官レジアス・ゲイズ中将。

なのだから。

ただでさえ本局と地上本部は中が悪いのに、更にその本局が地上に部隊を創ったお陰で地上は一部を除いて機動六課を敵視している。

その代表格なのかレジアス・ゲイズだ。

はやての脳裏に、副部隊長であるグリフィス・ロウランが言った事が過ぎる。

ここで地上本部に餌をやらないと、これから先機動六課は生き残れません。

餌、というのはあの次元漂流者の青年と、あの機体の事だ。

必ず帰らせると約束をしたのに、時空管理局の都合でこんなゴタゴタに巻き込ませてしまう。

これでは本末転倒だ。

だが、このままでは機動六課は生き残れない。

「仕方あらへん。

キラ君、すまへんな……」

苦い表情をしながら、はやては地上本部との通信を始めた。

一方、その頃”ストライクフリーダム”のコックピット内で、キラが機体の調整を行っていた。

頭部にあるメインカメラに移るのは、ミッドチルダの大都会と時空管理局地上本部の超高層ビルだ。

調整を一通り終え、キラは閉じられたハッチの方を見る。

これからの事はどうなるかは解らない。

時空管理局がどうなるかは知った事ではないが、その前に解決すべき問題がある。

フェイトに言ったあの言葉。

あの所為でフェイトにかなりの傷を負わせたかも知れない。

嫌、負ったのは确实だろう。

こうなれば謝った方が良いだろう。

だが今更どんな顔をして会いに行けと言うのか。

「うーん……………」

下を向き、頭を捻って考えていけば、何か白い布みたいなのが見えた。

端っただけしか見えないが、何か畳まれているようだ。

「ん？」

気になったので取り敢えずその白い布を引っ張ってみた。

出て来たのは、自分が着ていたザフトの隊長の証でもある白服とズボン、長い黒ブーツとフェイスの徽章が入った小さなガラスケースだ。

「何故、これがここに？」

確かに、パイロットスーツに着替えた後はすぐに発進していった筈なのに何故ここにある？

しかも所属不明の艦隊を全滅させた後にミッドチルダに飛ばされた筈。

考えれば考える程謎が深まるが、局員でもないのに管理局の制服を着たりずっとパイロットスーツでいるよりは良い。

キラはすかさず機体の電源を切り、パイロットスーツのファスナーを降ろして白服に着替える。

ズボンを穿いてファスナーに上げ、アンダーウェアの上に着用、ボタンを留める。

そして最後にガラスケースを開けて”フェイス”の徽章を着けて完成。

なのだが。

「漸くお気付きになりました。
マイマスター、キラ・ヤマト」

「え？」

その”フェイス”の徽章が言葉を発した。

「君、は……？」

「私はこれからこの機体と共に貴方の剣となり、また楯となるデバ
イス”フリーダム”と申します」

新たなる力、魔法の力との出会いだった。

怒りと新たなる力（後書き）

キラにデバイス作りました

堕ちた正義 天舞の自由（前書き）

ページ数多いし文長っ!？

キラがキラじゃないかも知れません……………

堕ちた正義 天舞の自由

「君が、”フリーダム”？」

「はい。これからはこの”ストライクフリーダム”と共に常に貴方の剣となり楯となる”フリーダム”です」

”FAITH”の徽章に酷似したデバイスからやはり、という答が返ってきた。

しかもさつきは驚いていた為に余り聞き取れなかったが、この声は最愛の女性にして最高評議会議長ラクス・クラインの声だ。

はやてから聞いた話だとデバイスには魔力が必要だが、自分には魔力の源となるリンカーコアがあるのかが解らない。

「マスター。

今マスターはリンカーコアがご自分の中にあるのか解らない、と思つてらっしゃいますね？」

「え？まあ、ね……」

「マスターのリンカーコアはSEEDに寄つて守られている為に、ここにいる方々には解らなかつたでしょうが、マスターの中にはリンカーコアがあります。

見事に隠蔽されてありますが、総合魔力ランクはSS+です」

「嘘っ!？」

キラが驚くのも無理は無い。

これまでに全く関係の無いミッドチルダに飛ばされた上に、お伽話にしか存在しない魔法というシステムに触れる事になり、またその魔法を使えるとなれば誰だって驚く。

しかもその総魔力量の多さがはやてから聞いた、管理局の中でも数える位しかいないと言われている、オーバーSランクと言われると驚愕は二乗になる。

”フリーダム”からの自身に寄る話は終わらない。

「術式は近接戦闘を主とするベルカ式と遠距離戦闘を主とするミッドチルダ式のハイブリットです。

バリアジャケットの方は……見た方が速いのでセットアップ！と言ってみてください」

「……………解った。

”フリーダム”、セットアップ！」

座ったまま叫ぶと同時に、キラの身体は深蒼の光に包まれてザフトの白服が粒子となり弾け飛び、変わりに何か深蒼の粒子によって構築されていく。やがて光が止むと、そこには、顔面の目以外を鉄ディア灰色の”ストライクフリーダム”の装甲に覆われたキラがいた。

背中に抱く八枚の翼はシートに座る際に引っ掛からない様に僅かながら小型化してあり、高エネルギービームライフルを両手に握っている。

両腰にはレール砲の砲身と共に二本のビームサーベルの柄がある。

「これは……!?!」

「マスターのバリアジャケットです。

今はディアクティブモードですがマスターの思考制御でVPS装甲を展開出来ます。

後失礼ながら、マスターのご愛機である”ストライクフリーダム”から取りましたが、如何でしょうか？」

「ああ、大丈夫だよ。寧ろ”フリーダム”と一つになれて嬉しいから」

これは根っからの本心だ。

「それは嬉しいです。

さて、次にマスターに教えるのは『念話』です」

「念話？」

「はい。

念話、通称思念通話です。

その名の通り、思念同士で会話をする事です。

メリットと言えば相手に悟られる事無く意思を仲間に伝える事が出来ますが、デメリットは表情に考えているのが出てしまう所ですが、マスターならそれはなさそうですね」

「まあ、ね。

取り敢えず、その念話というのはどうやってするの？」

「まずバリアジャケットを解除して楽な姿勢になって下さい」

「ん。解った。リリース」

言われるまま、キラはバリアジャケットを解除、装甲を元の白服に戻してみた。

起動させた際にセットアップと叫んだので、恐らくリリースと言えば戻らと思ったのでやってみたが、本当にバリアジャケットが解除された。

その際に”フリーダム”が「リリースと言わなくても大丈夫なのに」と思ったが、キラは知らない。

「では……………」

一拍置いて、キラの頭に”フリーダム”の音が響く。

マスター。私の声が聞こえますか？

「っ！頭の中に”フリーダム”の音が……………！」

今さっき私がやったのが念話です。

マスターもやってみて下さい。

やり方は、頭で思い浮かんだ事を相手に伝えるようなイメージです

「解った」

頷き、キラは目を軽く閉じて”フリーダム”から教えられた通りの事をやってみる事にした。

”フリーダム”。

僕の声が聞こえる？

はい。聞こえますよ。

流石はマスターですね

……どうやら、伝わったようだね。

ふう、とキラは安堵の息を吐き、シートに身体を預ける。

それなりに身体に気を張っていたらしい。

「今ここで出来るのは大体このくらいですね。

戦闘に置ける行動は、皆様がお休みの際にしましょう。

見つかったらどうなるかは解りますでしょうか？」

「うん。

じゃあ会話も念話での会話だね」

「はい」

新しい出会いと簡単な魔法の講義が一旦中断した時だった。

「キラ君、コックピットにおるね？」

「八神さん？（あ、危なかった……）」

調度会話を終えた時に、コックピットのメインカメラの上に備え付けられた通信モニターにはやての顔が映る。

狙ったかのようなタイミングだったので、”フリーダム”との会話

を聞いてたのか心配だったが、はやての様子から見てどうやら聞いて無かった様だ。

「あんな？キラ君、ちょいと部隊長室に来てくれへんか？」

「一つ用事があるんよ」

「用事、ですか？」

解りました。すぐに伺います」

「すまへんな」

一言謝るとはやては通信を切り、モニターが消える。

「どう見る？」フリーダム」

「恐らくマスターの今乗られていらっしやる”ストライクフリーダム”の事でしょう。」

それが地上本部か本局に知られたと思います」

「そうか」

「……余り驚いていませんね」

「うん。」

遅かれ早かれ来るかも知れないと思ってたから」

これは根っからの本心であり上に、答はもう既に決まっている。

はやて達に言った時と同じ答を言えば良いが、地上本部か本局の重鎮達にそれが通用するとは限らない。

だが、それだとしても答は一つだ。

「行こう。」フリーダム」

「はい。マスター」

”フリーダム”との会話を終え、キラはコックピットハッチを開いて外に出ると、真っ直ぐはやてがいるであろう部隊長室へと歩いていった。

「あれ？」

部隊長室に着いたキラは、その扉の前に止まっていた一人の女性の姿を目に捉えた。

長身で、桜色の長い髪をポニーテールに結んだ女性、シグナムだ。

シグナムもキラの姿と声に気付いたのか、キラの方を見遣る。

「ヤマトか。」

お前も主はやてに呼ばれたのか？」

「『お前も』とおっしやられると、シグナムさんもですか？」

「ああ。」

主に呼ばれてな。

そういえばヤマトの服、さっきまでパイロットスーツだったのに、今着ているのはザフト軍の制服か？」

「ええ。」

何故か”フリーダム”のコックピット内にありました。

ずっとパイロットスーツでいるのも難ですし、局員でもない者が管理局の制服を着る訳にもいかないのでから」

「（今見てみたらかなり似合ってるな……………）そうか。」

さて、入るぞ。

主を待たせる訳にはいかんからな」

「はい」

頷くと、二人は部隊長室のブザーを鳴らし、許可を待つ。

「開いとるから入ってええよ」

「失礼します」

許可を得た二人は揃って部隊長室に足を踏み入れた。

部隊長室の主であるはやては、自分の机で二人を待っている。

だがその顔は先程話した様な朗らかな顔ではなく、一つの部隊の部隊長としての表情だ。

「来たな。キラ君とシグナム」

「主、どうかなされましたか？」

「……………」

迎えるはやてに早速シグナムが用を聞いてみる。

キラの方は黙ったままはやての顔を澄み切ったアメジストの瞳で真っ直ぐ見ている。

「キラ君、服の事は後で聞くとして呼ばれた理由は知つとるな？」

「はい。」

僕の機体の事が時空管理局の地上本部か本局の方に知れ渡り、僕を連れて来させる様に命令が来た、という所ですね？」

「うん。」

さつきな、管理局の地上本部からの命令で、キラ君を”ストライクフリーダム”ごと来させる、って地上本部の総司令官であるレジアス・ゲイズ中將からの直々の命令が来たんよ」

「っ！！」

「……………」

レジアス・ゲイズ中將の名がはやての口から出された瞬間、シグナムの顔が苦々しい物に変わる。

管理局とは言え、一枚岩ではない。

特に管理局の中でも本局と地上本部、更には本局の息が掛かった機動六課はかなりの仲が悪い。

その中でもレジアスとはやての仲は修復不可能なまでに悪い。

「それでな、キラ君。

明日の午後一に”ストライクフリーダム”に乗って地上本部に行つて欲しいんよ。

その案内人としてシグナムを連れてつてな」

もう既にここまで進んでいるとなれば、断る事は既に出来ない。

断つてしまえば、はやて達に要らぬ迷惑が掛かってしまつし、呑めば『あの機体を渡せ』と言われる可能性が高い。

だが、キラは答を既に見付けている。

ならば

「解りました。

はやてさんの指示に従い、地上本部に行きましょう」

キラは、迷わなかった。

その夜の訓練所

皆がすっかり寝静まり、夢の園の中で遊んでいる頃に、キラはただ一人訓練所に訪れていた。

服装は変わらず、ザフトの白服のままである。

「フリーダム”。始めようか」

「はい。」

既に隠蔽工作や防音防壁も張っていますので思い切りやりましょう。スタンバイレディ……」

「セットアップ！」

昼間と同じ様に、叫ぶと深蒼の光がキラの身体を包んでいき、白服が粒子になり霧散すると同色の粒子が代わりにキラの身体を包んでいく。

光が止むと、キラの目以外の身体は再び鉄灰色の装甲に覆われた状態で現れた。

だが背中に抱く翼は、モビルスーツ時の時と同じように膨ら脛までとそう大差は無い。

状況や環境によって変わるらしい。

(VPS展開)

「オーライ。ヴァリアブルフェイズシフト、オープン」

思考制御で、VPSを展開させて四肢は純白に、ボディは青と黒に、背中に抱く八枚の翼は深蒼に、胸部砲口と関節、両手は黄金に色付き真の姿が露わになる。

ただそこに立っているだけなのに、威風堂々としている点も含めて目を覆う装甲があれば、そのまま”ストライクフリーダム”をそのまま小さくした様、それが”フリーダム”のバリアジャケットだ。

「改めて見るとますます”フリーダム”だね」

「マスターにはこれが一番合ってると思います、このバリアジャケットにしました。」

これから戦闘訓練を行います、やり方はマスターが心に思考に合わせて超次元空戦やドラグーンによる全方位空間殲滅、”ヴォワチユール・リュミエール”、レール砲やプラズマビーム、そしてドラグーン、ハイマットの両フルバーストが放てます」

「基本的行動は自分の思考と行動通りで行えと言う事か。そういえば、ドラグーンは大気圏の中じゃ……」

「デバイスの私は大気圏内でもドラグーンを制御する事が可能です。時間は限られていますから、やりましょう」

「……うん。」

「じゃあ、やるよ」

言うや否やキラはドラグーンを展開し、高エネルギービームライフルを構えていきなりフルスピードで空へ舞い上がる。

「フリーダム」、シミュレートを頼める？」

「シミュレート了解しました」

”フリーダム”の目の装甲が降り、訓練の空が映った視界に数機のガジェットが映る。

機動六課の訓練と同じ、本物に限りなく近い偽物である。

「ありがとう。じゃ、行くよ！」

礼を言うや否や、キラは光の翼を広げて二挺のライフルを携えて突っ込んでいった。

ガジェット達はそれを見逃す筈が無く、無数の青白い光弾を放つが、キラはそれを空気抵抗が存在するか疑わしい動きでかい潜り、深蒼の魔力弾を放ち反撃する。

ガジェットの装甲表面に当たる寸前に何か不可視のバリアらしき物に当たるも、耐えられたのは僅か一瞬のみで、その直後に動力部を貫通し爆発を起こした。

「今さっきのは……？」

「今のガジェットが纏ったのはアンチマジックフィールド。通称AMFです。

魔力の結合を解いて、魔法を無力化する魔導師に取っては天敵と言っても良い代物です。

今さっきそのAMFを貫通したのは、瞬時に弾に魔力殻を張ったからです」

「ありがとう」

「礼は後です。

さ、続けましょう」

頷くとキラは今度はビームライフルを腰にマウントさせ、ビームサ
ーベルの柄を握る。

先程ビームライフルから放った弾と同じ、深蒼の細い刀身だ。

「ハアアッ！」

事前に展開していたドラグーンも動かすと同時に”ヴォワチュール・
リュミエール”の力で加速し、迫る。

ガジェットは無論反撃に出るが、加速するキラが通り過ぎてドラグ
ーンが飛び回る場所で反撃を許す筈が無く、白い影が通り過ぎた後
に切断され、キラの背中を狙うガジェットは深蒼の砲塔により動力
部に穴を開けられて爆散していく。

僅か数秒で、その場にいるのはキラのみになった。

まあ、”フリーダム”の目に映ったのみのシミュレーションなので
元からキラのみしかいないが。

「まだ時間はある。
続けよう」

「はい」

数時間後

「今日はここまでですね。

明日も同じ時間と場所で行きましょうか」

「賛成……。」

初めてでかなり多くの事があったからか疲れたよ……」

地上に降りてふぁ、と欠伸をしながら返事を返すキラ。

スーパーコーディネイターと言えども疲れは溜まる。

コーディネイターやナチュラルも同じ人間なので、当たり前だ。

しかもキラが言った通り、今日は色々と有りすぎたのだ。

所属不明艦隊との戦闘から始まり、いきなりのミッドチルダへの転移、リニアレールにてモビルスーツに襲われていた機動六課を助け、その後その機動六課へと連れて行かれ、愛機を渡せという機動六課から真っ向から反発し、またその後子供を戦わせる事に何の抵抗を示さないフェイトと口論、また魔法という新しい力の”フリーダム”との出会いで体力、精神力共に疲れていた。

しかも皆が寝ている夜中に見つかからないようにコソコソと魔法の練習をやったので、精神にもかなり疲労が溜まっている。

「……………そうですね。」

では、ゆっくり休みましょうか」

「うん…………」

睡眠を試みようとする目を擦り、キラはゆっくりと自分に宛てられた部屋に向かい、ザフトの白服からアンダーウェアに着替えてベッドに身を投げ出す。

「お休み……」

「お休みなさいませ」

言っつや否やキラは真っ直ぐ夢の中に旅立っていった。

翌日の午後一、機動六課ヘリポートの外で停止したままの”ストライクフリーダム”の前に、ザフトの制服を着たキラと局員の制服を着たシグナムがいた。

その他の全員は、後ろで羨ましそうな目線（例外としてフェイトはちよつと複雑そうな表情）をしながら見送っている。

因みに今更だが何故シグナムかは人の秘密は絶対に口外しないとはやてからのお墨付きだからである。

「じゃあ、二人共行ってきてな」

「はい」

「…………では、行きましょう。
シグナムさん。
掴まって下さい」

「う…………うむ…………」

左手でラダーワイヤーを掴んでいる為に、右腕を真つ赤に頬を染めたシグナムに差し出すと、シグナムはキラの胸に抱き着くように身体を預ける。

(…………うう…………。)

男にこんな事するのは初めてだ…………。しかもヤマトの身体、細いがガッチリしてて良い匂いが…………って私は一体何を言ってるんだ!?)

(…………し、シグナムさんくつつきすぎですよ…………。女性の方から抱き着かれるのってラクスと別れてから久しいから余計に…………)

お互いに真つ赤になるが、そんなの知らないと言わんばかりにラダーワイヤーは二人の身体を胸部コックピットへと誘っていく。

「こ、これが”ストライクフリーダム”のコックピットか…………」

「は、はい…………。」

し、シグナムさん、しっかり掴まって下さいね。
高速移動時にはかなりのGが掛かりますから」

「わ、解った…………」

頷くとシグナムは横抱き(簡単に言えばお姫様抱っこ)の形になり、

キラの首に手を回して益々密着する。

首筋に顔を埋めているので、画面を見てない所を見るとキラ（顔真っ赤のまま）はキーボードを取り出して目にも留まらぬ速さでキータイピングを始めて、パスワードを次々と看破していく。

そして、全てのパスワードを解除し終えて、機体の電源やVPS装甲をオンに切り替える。

「じゃあ、行きますよ」

「う、む……」

「……………キラ・ヤマト。」

”フリーダム”、行きます！」

いつもの掛け声を言うと同時に片膝立ちだった機体が立ち上がり、膝を折り曲げると一気に大空へと飛翔していった。

目的地は、時空管理局地上本部だ。

「凄いな……………」

これがヤマトからの目線か……………」

「あ、はは……………」

メインカメラとサブカメラに映った下界を見て、シグナムは驚嘆の声を上げる。

彼女は空戦の、しかも歴戦（物凄いご長寿）の騎士だがこう言った機体のコックピットから見る下界は慣れていない為に何処か新鮮味を与えていた。

因みに今飛行している所はかなりの高さだ。

市街地はもうミニチュアの地図を見ている様で、地上を行き来している人々は余りに小さすぎて見る事が出来ない。

「そういえばヤマト。」

テストロッサとあの二人の事だが」

「……………はい」

いきなり話を振ってきたが、キラは冷静に対処する。

彼女を上司に持つシグナムがこの話をするのは、もう既に解りきっていた事なのだから。

「あの二人を保護したのは、そのあいつの過去が原因なんだ。だから、あいつを余り責めないでやってくれないか？」

「……………はい。」

後、僕からはエリオとキャラの命を救ったのはフェイトさん自身ですが、その道筋に灯火を点させるのもまたフェイトさんの役目。

戦場に出してその灯火を消しては本末転倒です」

キラが言いたい事。

それはフェイトはあの二人の未来の鍵を握っている。

平和に生きるか、修羅に生きるかの二つの未来。

例え二人がどんなに苦しい過去を持っていても、未来を決めるのは二人を救ったフェイト自身なのだ。

最も、本人がそれに気付いているとは思えないが。

「……テストロッサには、そう伝えておく」

「……………はい」

シグナムに頷くキラは、機体を操縦しながら考えを時空管理局のやり方に切り替える。

実際、時空管理局のやっている事はかつてアスランやシンから聞いたロドニアにある”ブルーコスモス”、”ロゴス”のラボの事等が可愛く聞こえる程だ。

聞いた位で見ているのではないので余り詳しくは知らないが、”ブルーコスモス”や”ロゴス”は宇宙開発に携わっていた両親を事故やテロに見せかけて殺害し、またそれにより身寄りの無くなった子供を引き取り度重なる薬や手術、強制的な殺人映像の視聴、更にテストと称して仲間同士の殺し合いをしていたと、上げれば切りが無い。

更にノルマに辿り着けなかつたら処分をしていった。

だが管理局のやっている事は正義と謡い、身寄りの無い子供を引き取り育てるのではなく、自らの戦力に入れている。

まだ幼い、戦う事を理解していない子供達を下手をすれば死ぬ戦場、しかも死亡率の最も高い最前線へ向かわせて、向かわせた張本人達は後ろでただ命令を出しているのみにと、そんな口くでも無い組織には絶対に従わないし、また流されない。

「ヤマト。」

地上本部が見えたぞ」

「はい。では着地しますので、しっかりと掴まって下さい」

地上本部の無数の高層ビルが見え、キラは思考を切り替えると操縦桿を操りゆっくりと着地姿勢に入らせる。

「こちら時空管理局地上本部だ。

そのまま地面にあるヘリポートに向かって着地すべし。

繰り返す。

そのまま地面にあるヘリポートに向かって着地すべし」

コックピットにあるスピーカーから通信の声が聞こえる。

メインカメラを下に向けてズームして見てみると、誘導のつもりか手を振っている局員がいる。

どうやらあそこに降りると言うものらしい。

「解りました」

頷くとキラはそのまま着地姿勢のバランスを保ち、ゆっくりとそのへりポートに着地した。

地上本部のへりポート

へりポートには数人の武装局員達に混ざって、一組の男女がゆっくり着地してくる”ストライクフリーダム”を見上げていた。

肥満体な身体だが目つきは意志の強さを見せる様に鋭く、纏っている雰囲気もまた鋭い。

髪は茶髪で揉み上げと髭は繋がっている。

着ている服は管理局の上級官位の者のみが着用を許される、青い制服と白いズボンに、左胸のポケットには時空管理局地上本部の紋章エンブレムがある。

隣に立つ女性は男性とは全くの真逆のスマートな体型をしており、茶髪のセミロングの髪に眼鏡を掛けているが、纏っている鋭い雰囲気は男性と同じだ。

この男性は首都クラナガン防衛長官兼地上本部総司令官を携わるレジアス・ゲイズ中將で、女性はそのレジアス・ゲイズの娘であり彼の秘書を勤めるオーリス・ゲイズ三等陸佐だ。

「あの巨大な人型質量兵器とそのパイロットか……。あの小娘も中々面白いのを保護するな」

レジアスの口から期待に混じった声が聞こえる。

時空管理局本局と地上本部に限らずに、あの機体に秘められた力と技術が喉から手が出る程欲しい。

パイロットを機体から降ろした後に、技術や力を抜き取りまた機体を次元の海にへと捨てれば問題は無い。

否、問題と言えばそれをパイロットが承認するかしないかだが、そこは管理局の現状や帰還の事をちらつかせれば

だがそれは限りなく非人道的なやり方だとは気付いている。

レジアスは首を軽く左右に振り、邪な考^{よこしま}えをすぐに否定する。

人、しかも次元漂流者から大切なものを取り上げ、またその決定権がこちらにあつて勝手に捨てるのは正義を行っている管理局がすべき事ではない。

だが今は、もうその正義が地に墮ちた。

絶対正義なんてのはただの方便。自分達をただ正当化する為のただ

の絵空事。

いつの間にこんなに墮落してしまったのか。若かりし彼自身が望んだのは、こんなものではなかったと歎いてしまう。

だが今は本局が地上本部の戦力や予算をかなり吸い上げている為に、地上の犯罪率は年々高くなっていつている。

これが地上の現状。

そして認めたくはないが、管理局の正体だ。

ガシャァン……。

そうこう考え、思い出している内に、機体が突風を上げながらゆっくりと両の脚を地面に付けた。

「でっけえなあ……………」

ある一人の武装局員が呟く通り、”ストライクフリーダム”は高さ約19メートルある為にそう思うのも無理はない。

そしてゆっくりと胸部コックピットハッチが開き、ラダーワイヤーを使って一組の男女が出て来た。

女性の方はシグナム、男性の方は

「なっ!?!」

「「「わ、若い!?!」「「「

レジアスの驚愕に続いて秘書のオーリス、そして武装局員達が驚愕の声を上げる。

次元漂流者の男性、キラ・ヤマトの見た目、容姿はかなり若いからだ。

初めて見る人は驚くのも無理はない。

はっとしたレジアスは、おもむろにオーリスと数人の武装局員を連れて二人に近付く。

「……………案内ご苦労だったな。
シグナム二等空尉」

「いいえ」

素っ気なく敬礼を返すシグナムから、今度はキラに視線をやる。

「ほう。」

私は時空管理局地上本部総司令兼首都クラナガン防衛長官のレジアス・ゲイズだ。

こっちは私の秘書、オーリスだ」

「オーリス・ゲイズ三佐です」

「次元漂流者のキラ・ヤマトと申します」

「ふむ。キラ・ヤマト君か。」

では、私について来ると良い。」

シグナム二等空尉も共にな」

「はい」

「……………はい」

レジアスが二人に背中を見せて歩くと、瞬時に数人の武装局員がデバイスを起動させてキラとシグナムを囲み、レジアスの後ろを歩く。

「シグナムさん……………」

これが……………」

「ああ……………」

見苦しい所かも知れないが、これが我等と地上本部の溝だ……………」

これが、時空管理局本局と地上の有様だ。

何とも酷い有様だが、情報と中身が余りにも少ない。

まだどう出るかは解らない。

ふと、レジアスが何かの会議室に脚を踏み入れ、武装局員達もキラ達を誘って入る。

会議室の中には、上座に座ったレジアスを始めとした地上本部の重鎮達が椅子に座り、キラとシグナムを待っていた。

キラは椅子に座り、シグナムはキラの後ろで控える。

ふと、レジアスが寛大な態度（半ば努力するように）で話し掛けて

きた。

「さて、次元漂流者の君の事だが、我々に協力してくれるなら、君の世界の搜索し、また帰還させる事はやぶさかではない」

いきなりのストレートな物言いだ、キラは気にせずレジアスの演説を聞いている。

後ろのシグナムは、眉を潜めているが、レジマスは素知らぬ態度で話し続ける。

「今の君にこんな事を言うのも難だが、今の地上本部は慢性的な人員不足でな。

だが、君の機体に秘められた力と技術を我々に提供して貰いたい。

そうすれば、君の世界の搜索をし、君を元いた世界に帰そう」

今抱えている問題を訴えてキラの良心を動かそうとするが、キラは何の反応も示さずにレジマスだけを真っ直ぐ見ている。

相槌の一つも打たず、ただ真っ直ぐに。

そうするキラに、レジマスは説明を続けるが、全く何の反応も示さない。

そして、レジアスの説明が終わるとキラは一つの答えをゆっくりと、しかしハッキリと答える。

「その要望は受け入れられません」

その答えを聞くと、レジアスの表情は一変。

温厚な顔が、怒りで大きく歪んでいった。

「何だと？今、何と言った？」

「その要望は受け入れられません。
あの機体、”ストライクフリーダム”の力と技術は渡さないと言いました」

それ以上無い程ハッキリと、キツパリと答えるが、キラは流石にこれ以上は言わなかった。

レジアスが地上の事で悩んでいるのは解ったが、それを解決する為に自らの機体の技術を使わせる事やましてやいじくり回す事も嫌だった。

「……………我々には必ずしも貴様を元の世界に返す義務等無い。
処分も簡単なのだぞ？
それでも良いのか？」

「……………その時は、僕はたった一人でも”フリーダム”を駆り時
空管理局戦う所存です」

「っ！？」

要望から脅迫に変わり、キラもそれ相応の答えを出すと、レジアスや重鎮達、そしてシグナムは驚愕に目を見開き、恐怖からダーツと冷や汗をかいた。

キラがああの機体を駆り、自分達に刃を向ければその瞬間に管理局は

滅亡する。

だがそれ以上に驚いたのは、それをハッキリと言ったキラの覚悟だ。権威や建前、財力や脅迫は覚悟を決めた者には一切通用しない。

恐怖と殺気混じりのレジアスの目線と覚悟と殺気、重圧混じりの鋭い視線が交錯し、重鎮達とシグナムは息を飲む。

鉛の様に重い空気の中、諦め切れないのか、レジアスは口を開ける。

「では、貴様は」

その時、レジアスの秘書の一人である局員が部屋に入り、キラに見向きもせずにレジアスに小さく耳打ちする。

「何？」

それはどういう事だ！？」

レジアスは息を荒げながら彼が持って来たある紙片を手に取り、目を通していく。

段々と顔が驚愕に歪み、身体が震えていくが、ふとキラを見ると吐き捨てるように言った。

「……最高評議会からの命令により、貴様の機体を取り上げたり技術を抜き取る事はせず、貴様の世界の搜索する。」

また、貴様には一切手出しをせず、挑戦的な態度も不問とする」

聞き慣れぬ言葉の羅列だが、キラは自身が限りなく自由に近付いた

事が解った。

スカリエッツィのラボ

ミッドチルダの奥深くにあるスカリエッツィの秘密研究所に、スカリエッツィの姿があった。

スカリエッツィは今、幾本もある培養層の真ん前で、投影されたコンソールをしきりに叩きながら誰かと投影を通しながらの通信している。

その投影に映った人間は、滑らかな金髪を肩まで伸ばし、顔には白い仮面を着用し、キラと同じザフトの白服を着ていた。

「。

君の要望通りに私の名前を使って最高評議会に要請してみたよ」

「ほう？」

では、その最高評議会は何と？」

「要請を快諾してくれた。

あのキラ・ヤマトなる少年の世界の搜索までも行つとね」

「それは素晴らしいな」

口元に笑みを浮かべる仮面の男だが、仮面の所為でそれは余り解らない。

「君があの子にどんな思い入れがあるのかは敢えて聞かないよ。そっちはそっちで、こっちはこっちで好きに動く」

「ああ。

では、これで失礼しよう」

それを言うや否や、仮面の男が映された画面は消え、静寂が訪れる。

(嫌、実際彼がある世界から持って来たあの兵器のお陰で、私の計画も順調に進んでいってるよ。

ラウ・ル・クルーゼには礼をしなくてはな……………)

二つの狂気と欲望、二つの誠実なる想いがぶつかる日は、そう遠くない。

設定（前書き）

キラとフリーダムの設定です

設定

キラ・ヤマト

機動戦士ガンダムSEEDの主人公であり、SEED DESTINYの主人公の一角を担っていたがこの作品では原作のなのは達に代わり主人公の座にいる。

原作の最後でザフトの白服スベシャルエディションとファイナルプラスになっていて、それから一年が経ったので特務隊”FAITH”に着任されている。

最高評議会議長に就任したラクス・クラインとは元々付き合っていたが、”FAITH”を任された際に別れている。

本局と地上本部、機動六課とスカリエッティとラウの間にある絡み合った系の中にいるが、管理局員でも無ければ犯罪者の類でもない第三者の目線で見えるが、管理局に対して明白あからさまに嫌悪感を抱いている為にレジアスを始めとした時空管理局に挑戦状を叩き付けた。

総合魔力ランクはSS+だが、魔導師ランクは無し。

機動六課は時空管理局の思想に染まっているが、まだ間に合うと思いい叱咤したり応援したりしている。

”ストライクフリーダム”の技術や力を管理局に渡さない為に自分で整備や調整をしたり、FW陣の訓練を見たり、デバイスの整備や調整の手伝い、ロングアーチの手伝い、フリーダムの秘密特訓と次元漂流者の割に一番の苦勞人だったりするが休める。(裏でははやてよりも苦勞をしているという噂もちらほら)

”フリーダム”

キラ専用のデバイスでAIはラクス（田中理恵）の声。

待機状態は”FAITH”の徽章。

バリアジャケットはキラの身長位の大きさだが目の装甲は無い”ストライクフリーダム”。

術式はミッドチルダ、ベルカのハイブリットでオールレンジの万能型。

武装はただ”ストライクフリーダム”をそのまま小さくした様な感じだが、性能はモビルスーツの”ストライクフリーダム”そのまま。

キラの魔力光が深蒼である為、放つ魔力弾や魔力刃は全て深蒼。

キラが何もしなくても自らの整備は自分でやったり、他のデバイスの状態等を逐一持ち主であるキラに伝えたりと頼れる相棒だが、今はキラ以外の人物やデバイスの前では動けないので余り意味が無い。

他に特殊能力があるらしいが、本人曰く今紹介しても意味が無い…らしい。

たった一つの生命（前書き）

………言うのは難ですがYouTubeにある陸上自衛隊、航空自衛隊、海上自衛隊の自分達の事を省みずに国や人を守り救う動画を見たらISを書いている自分が馬鹿らしくなって来ました………

たった一つの生命

「ヤマト。」

言いたい事は解るが、ゲイズ中將に向かつてあのような事を良く言えたな」

「……………」

六課隊舎へ帰還していく”ストライクフリーダム”のコックピットで、行く時と同じ格好でシグナムがピシヤリと言うが、キラは黙ってまま操縦に専念している。

レジアスにあんな事を言った、というのは『ストライクフリーダム』を駆り、時空管理局と戦う所存』というのである。

機体を守るという意味は解るが、あの重鎮達を目の前にしてそんな事をキツパリと言えるのは相当な馬鹿か、それともかなりの命知らずか、もしくはハツタリかほら吹きだったかだ。

だが今操縦しているキラは、そんな馬鹿でも命知らず、ハツタリというのには収まらなかった。

嫌、実際にハツタリは有り得ない。

キラは本気で管理局と戦うつもりだったのだ。

オーリスに阻まれたが、レジアスがもし未だにキラに縋り付く様であれば一切の容赦はしない。

だがそれは逆から言えば自分の尻は自分で拭け。問題に決着を付け

られないなら犬死にしろ。人員不足も自分達の問題なら、それを次元漂流者に頼まずに自分達で解決しろ。と遠回しに言ったのだ。

まあ、本当にどうしようもないなら手を指し伸ばすまでだが。

「まあ、お前がこの”ストライクフリーダム”がかなり大切にしてるのは解るが、今後はどうするつもりだ？

管理局地上本部を完全に敵に回したぞ？

本局も同じ事を言っつもりか？」

「……ええ。

例え時空管理局本局の高官にも同じ事を言っつもりです。

例え、レジアス中將が言っってた最高評議会の命令であっても」

例え神がああ機体を超越せと言ってきても、愛する女性ヒトの祈りが籠められた”ストライクフリーダム”は絶対に渡す事なく、むしろ守る為に、そしてこの世界の人ではなく、自らの手で握れる人の未来を守る為に戦う。

だがそれを行うのは自分一人ではない。

キラのもう一人の相棒の”フリーダム”もいる。

それがこの世界キラの覚悟であり、決意だ。

決意や覚悟を決めた者には、建前や権威や財力は一切通用しないし、またキラは優しい顔をしており、性格もそれに呼応するかのように人好しで泣き虫だが、元はかなりの強情でこうと決めたら絶対に退かない性格だ。

その性格は、幼馴染みであるアスランでも矯正出来なかった程だ。

「……………はあ。」

まあ、お前ならそう言うと思った。

さて、もうそろそろ隊舎に着くから、着地姿勢を取った方が良好ぞ」

「はい」

シグナムから促されたキラは、操縦桿を動かして着地体制に入る。

ガシャァン……………

暫く経って、脚の方から衝撃が走り、着地した事を知らせる。

それと同時にシグナムの目を隠して機体に強力なプロテクトをかけ、電源を切る。

「……………じゃあ、掴まって下さい」

「（またやらないとダメか……………）う、む……………」

今はもう何ともないが、地上本部に行った時の事を思い出したらしく、シグナムは顔を赤くしながら再びキラの首に腕を回し、首筋に顔を埋める。

キラはそれを確認すると、シグナムを抱き上げたままシートを競り上げて、ゆっくりとラダーワイヤーで地上に 正確には六課ヘリポートに 降りる。

ヘリポートには六課の部隊長である八神 はやて、訓練を終えたで

あろう高町　なのは、フェイト・T・ハラウンが制服のまま立っていた。

「お帰りな。」

シグナム、キラ君

「はい。主はやて」

「……ただいま帰りました。」

八神さん。高町さん。フェイトさん

「ああ、お帰りな。」

キラく……って何故フェイトちゃんは名前で私となのはちゃんには名字なん？」

「そっだよ！差別じゃない。」

何でなの？」

一斉にギャーギャーと文句を言うのはとはやて。

フェイトはフェイトで、複雑な表情をしながら後ろで控えている。

キラは少し後ろに下がる。

「そっおっしやられても、高町さんと八神さんは自分の事も名前で呼んでも良いとおっしやらなかつたじゃないですか」

「それとこれとは関係あらへん！」

機動六課部隊長としての命れ……じゃなくて、八神　はやて個人の願望でキラ・ヤマト君には私等隊長陣の事を名前で呼ぶように！

ええね？」

「い、今何か聞き間違いかも知れませんが命れ」

「んなもん聞き間違いやから。」

「さあ、私等の下の名前は何て言うんや？」

「……………」

完全に、ニヤニヤと意地悪に笑うはやてのペースに飲み込まれてしまった。

なのはとフェイト、シグナムを見ると、全員苦笑いしながら退いている。

断ったら断ったで、後で何をされたり言われたりするか解らない。

しかもはやてのニヤニヤの裏には『言わなかったら殺す』と語っているから尚質が悪い。

これには流石の”フリーダム”もキラに警告を出した程だ。

「……………はやてさん。なのはさん」

「うんー」

よろしいー」

「うん」

「……………はあ」

「はあ……………」

うんうんと頷く二人と対照的に、キラとフェイトは深いため息を吐いて頂垂れる。

そのキラの肩を苦笑しながらシグナムが軽く叩く。

「シグナムさん……」

「恥ずかしいが、こうなった主はもう止められん。諦める」

「……………はい」

はあ、と溜息を吐きつつ、キラはゆっくりその場から去っていった。

その後のヘリポート

「あの……」

主はやて、何をやる気なんですか……………?」

なのはとフェイトは仕事があるというので、行かせたから、はやてとシグナムが必然的にそこに残った。

だがシグナムの格好が変だ。

制服なのだが、何と云うか物凄く小さな子供に言えない、大人向けの格好でバインドされている。

「さあてシグナム？」

「ラダーワイヤーで行く時に抱き着いたり、”ストライクフリーダム”に乗ったりした時にキラ君に密着したやろ？」

「な、何故主が”ストライクフリーダム”に乗った時のを！？」

「何故知ってるって？」

「決まるとるやろ。」

「女の勘やー！」

「ドーン！」と戦隊物の登場シーンよろしく言いながら空の彼方を指差すはやて。

「もう何と言うか、こんな主で大丈夫なのか？と心配になってくる。」

「さて、どうだったんや？」

「キラの身体、匂い、感触と事細かに偽りなく、洗い浚い主である私に教えてな？」

「う、うっ………」

今度は自分の立場を利用して聞いてきた。

「だがシグナムはその時の事を思い出したらしく、顔を真っ赤にしなから黙り込む。」

「キラと交わした約束と、はやてとの主従の関係が、シグナムの頭の中で小さいシグナム同士が戦っている。」

はやては答えないシグナムに業を煮やしたのか、次第に指をワキワキさせながら近付く。

「うーん……。」

答えられへんか。

ほんなら、口じゃなくてシグナムの身体に聞こか」

「へ？

ちょ、主!？」

そ、そこはやめっ……ひゃん!!」

「ほーれほーれ。

答える気になつたか?」

「や、止めて下さいっ!

そこはっ……うひゃあ!!」

嫌ああああ!!!!!!」

シグナムの色つばい叫び声が六課隊舎中に広がった。

その後、シグナムの叫び声を聞いたキラとヴィータが何事かと来たが、終始ニヤニヤしながら説明するはやてにキラはかなり退き、ヴィータはまたかと言わんばかりに溜息を吐いたのは言うまでもないだろう。

翌日のキラの部屋

「ふぁ……。おはよう、”フリーダム”」

「マスター？」

ただ今朝の四時ですが、どうかされましたか？

ザフトはここには無いので、もう少し寝ていても問題はありませんですよ？

しかも特訓を終えてからまだ一時間しか経っておりませんよ？」

「そういえば、そうだったね」

”フリーダム”が言う様に、ここにはザフトが無いから、無理にザフトがあった様に振る舞う必要が無いし、魔法の特訓が終わってからそう経っていない。

日中は”ストライクフリーダム”の整備や調整、ロングアーチの手伝いやFW陣の訓練を見たり、更にはデバイスの整備や調整等、しかも夜遅くには皆に隠れて”フリーダム”の秘密特訓と、休む暇が無いのだ。

スーパーコーディネイターであるキラも回復能力や身体能力、頭脳等極限にまでに高めてあるとは言え疲れは溜まる。

今は本人も気付かないくらいだが、それがストレスと共に溜まりに溜まっていくといつかキラでも倒れてしまう。

デバイスである”フリーダム”に取っては、今のままではそれがい

つか来る気が気でないのだ。

「……………うん。そうだね。」

「じゃあ五時くらいまでもう一眠りするよ」

「解りました。」

「ゆっくりお休み下さいませ」

”フリーダム”の安心した様な声を聞くと、キラはもう一度ベッドに身を横たわらせ、眠りの闇に落ちていった。

一時間後

「ふぁ……………」

「おはようございますマスター。きっかり五時ですよ」

「おはよう。」 ”フリーダム” 「

ベッドから起き上がると、暁が出かけている東の空に目を移す。

顔を出した太陽が少しずつ僅かに見える”ストライクフリーダム”の灰色の装甲を明るく照らしていく。

暫くそれを一望すると、キラはアンダーウェアの上にハンガーに架けてあるザフトの白服に身を包むと、”フリーダム”を左鎖骨らへんに着け、歯磨きセット 部屋に置いてあった物 を持って部屋から出て行った。

シャカシャカシャカシャカ

「あ、キラさん。」

おはようございます」

シャカシャ…ピタ

「ん？」

ああ、おはよう。エリオ」

歯磨き粉を付けて歯を磨いていたキラの隣に寝間着らしい衣服に身を包んだエリオがやって来た。

手にはマグカップと歯磨きセットを持っていて、右手には”ストラ―ダ”の待機状態である腕時計を着けている。

「隣良いですか？」

「うん。良いよ」

「ありがとうございます」

礼を言うとエリオはキラの隣に立ち、歯磨きを始めた。

マスター。

あの子のデバイスですが、マスターが行った昨日の調整があったお陰でバグや不注意が全然見当たりません

そうか。

それは良かった

”フリーダム”からの念話による調整を終わらせて、キラはあの時にやった調整や整備を思い出す。

あの時、キラが見なければ本当に危なかった。

シャーリーから初めて見せて貰った時のFWのデバイスはあのリニアレールの初陣での映像、試運転や微調整、ましてやまともな起動すらも行っていないかったのだ。

初陣での途中で落ちていったエリオとそのエリオを助ける為に制御の難しい竜召喚を行ってエリオを救ったキャラ。

そしてその二人を助けようともせずには笑みを浮かべていた隊長陣。

デバイスでは、その状態であの最前線に追いやったのか、と思いついたキラはシャーリーが休んでいた時にコンソールを叩いてコッソリ幾度も微調整や再整備を行ってバグやウイルスを駆除し、不完全なデバイスを完全なデバイスに変えた。

この中でもスバルのウィングロード、ティアナの魔力補助、エリオの速度制御、キャラのブーストと竜召喚の補助プログラムを作り上げるのには難儀した。

キャラは更に『竜召喚はあの時に初めて成功した』、と言ったがそれは逆から言うと『隊長陣は暴走の危険が高い竜召喚を当てにしていた』というものだ。

もしそれで失敗していたらどうなるか、知っていた筈なのに助けようとも、フォローをしようともせずには笑みを浮かべていた隊長陣にキラは改めて隊長陣の人間性に深い疑いを持った。

「命は、何だって一つなのに……………」

「え？」

「あ、何でもないよ」

まさか聞かれていたとは思わなかったキラは、口を濯いで洗顔を
とさつさと自分の部屋に戻り、準備を終えると早足で訓練所に向か
った。

その白い背中には、深い怒りと疑いが滲んでいた。

たった一つの生命（後書き）

今書いてるISの小説を消そうと思います

大天使 別の地球へ(前書き)

うわーお！

タイトルだけで解っちゃいますね、これ！(笑)

大天使 別の地球へ

数週間後の訓練所

「はい！」

今日の朝練はこれで終わり！

朝ご飯を食べてきて良いし、シャワーを浴びてきても良いよ！」

「「「「はい！」「」「」

今日もまた隊長陣とそれに混じっているキラに扱かれたFW陣。

何故ここにキラがいるかは、軍の隊長という事で観察力や戦略眼が優れているキラにも意見を言わせて、FWの実力アップを図る為である。

いつもは泥や汗で汚れているのだが、今日は顔や訓練用の服には汚れや汗は無い。

その理由の一つとしては、キラが行った再調整なのだが、もう一つ理由がある。

それは

「皆、今日の午後一からの出張任務の準備は出来てる？」

「はい。」

私のもう既に終わってます。

スバルの方は後少して準備が終わりますが」

「……ははは」

「僕も既に終わってます！」

「私もです！」

どうやらスバル以外全員が出張任務とやらの準備がいるらしい。

「……そういえば、キラ君の方はどうなの？」

「え？」

今度の出張任務には前々からはやてさんから誘われてて、昨日まで迷ってましたが、行く事にしました」

そう。

今回の出張にはキラにも行かないかとはやてから誘われたのだ。

だがキラは今の立場では自分にはそれは許されないだろうというのと、その出張任務での行き先に少なからず興味を抱いていたのでかなり迷っていたのだが、どうやら興味の方が勝った様だ。

「そう。」

で、準備の方は？」

「はい。もう既に準備は終わりましたし、もしもモバイルスーツが来た時の対策とシャーリーさんにも触れない様に忠告してます。また白兵戦にもそれなりに自信があります」

「そっか。」

じゃあ皆、今日の1000に屋上ヘリポートに集合！」

「了解！」「」

号令をかけると同時に、蜘蛛の子を散らす様に、FW陣が歩いていく。

それを見たキラ達も続く様に部屋に帰り、それぞれ屋上ヘリポートに向かって歩いて行く。

その胸に、大きな興味と不安を抱えて

屋上ヘリポート

準備を終わらせたキラはエリオとキャロ、フェイトと途中で合流し、真っ直ぐ屋上ヘリポートに歩いていくと、ヘリポートには既に見覚えのある青、橙、桜、真紅、金、茶、亜麻がいた。

「キラさん！エリオ！キャロ！」

「スバルさんとティアナさん」

「それに、はやてさんにシグナムさんとシャマルさんも」

「ああ」

「はい!!」

「うん！」

だって私も前線メンバーやもん!!」

一人は冷静に、二人は元氣一杯に返事を返す。

というか、はやてはロングアーチなのに前線メンバーというのはどうかと思う。

「あ、キラ君はまたザフト軍の制服なん？」

「ええ。」

お金も無いですし、六課のお金を使う訳にも行きませんから」

「……キラ君は変な所で遠慮するなあ」

「……ほっとして下さい」

苦笑するはやてに、キラは恥ずかしくなったのかムツと顔をしかめる。

「まあ、ええで。ほな行こうか」

「はい」

「」「了解!」「」

はやてからの指示を受け、六課の前線メンバーは一斉にへりに乗り

込んでいき、全員を乗せたへりはプロペラを回転させて飛んでいた。

跪いている状態で停止している”ストライクフリーダム”の装甲が、寂しげに光っていた。

転送ポート

転送ポートの前に着いたはやて達機動六課とキラは、ある一つの資料を読んでいた。

「文化レベルB、魔法文化0、次元魔法手段無し……。
第97管理外世界……、惑星名地球……。
なのはさん達の故郷ですね」

「うん。」

今回ロストロギアの反応が見つかったのは、地球にある国の一つ、日本の海鳴市って言う所なの。

「……………あ」

スバルからの質問に、なのはは笑みを浮かべて答えるが、ある一角を見て笑顔が凍り付く。

なのはに続く形でFW陣と隊長陣もその一角を見ると、また同じ様に笑顔が凍り付いた。

その一角にいたのは、笑みを浮かべているが悲しげな目をしているキラ・ヤマトだからだ。

キラがいた世界はC・Eの地球。

簡単に言えば管理局の技術でも難しい平行世界。パラレルワールド

キラは未だに故郷に帰れる道筋が解らないのに、はしゃいでしまった。

その事が、悔やまれる。

「さ、行きましょう！
時間ももつたいないです」

それを感じ取ったのか、キラは表情をパツと明るいものに変え、前に歩いていく。

キラが、皆を気遣って振る舞っているのは誰だって解った。

が、その空気を明るく変えた声があった。

「キラさんの言う通りです！
行きましょう！」

いつの間にかエリオとキャロくらいの大きさになったラインが、キラに続いて転送ポートに入る。

「……そうやね！行こう」

「うん！」

「そうだね！」

「承知！」

「ああよ！」

「……はい！」

ラインにより、ちょっと明るくなった六課は、皆転送ポートに入つて、消えた。

第97管理外世界、地球

光が消えて、はやて達とキラの視界に映ったのは、青々と茂った森と湖、それと豪華なコテージだった。

澄み切った青い空と白い雲が、美しいコテージが湖に映り、癒しの景観となっている。

因みにはやてとシグナム、シャマルは先に寄る所があるらしく、今はいない。

「ここが、なのはさん達の故郷……………」

「そう。」

ミッドチルダとそう変わらないよ?」

「空は青いし、太陽は一つだし…………」。
森も普通にありますね」

極々当たり前な事だが、大都市が多いミッドチルダにいれば森等の自然に触れたり感じたりするのはかなり少ないだろうから、そう思うのは仕方ない事だと思う。

「やっぱり空に”プラント”が見えない……………」

「え?何か言いました?キラさん」

「あ、嫌。

何でもないよ」

つい本音が漏れ出そうになったが、キラは手を振りながらそれを隠す。

聞いたティアナは「そうですか…………」とだけ言うと、キラからなのはに視線を移す。

「けど、ここって確か管理外世界でしたよね?
領有外だから、ここを司令部にする、という事になるんですか?」

「そうだよティアナ。」

「ここは現地の人の別荘なんだよ。」

臨時の管理局の捜査員待機場所にする、というので現地の方、まあこの別荘の持ち主の人が快諾してくれたんだよ」

「そうなんですか」

まず一部の人間 時空管理局の存在を知る知人等 に許可を得てから行動はするが、事情を知らない人間が見たなら別だ。

それをしなかったりまたいかなかったりしたら、世界所か次元レベルの不法侵入者だ。

どちらにせよ、行動に深い注意を払わなければならないのは確実だ。

納得した様に頷いたティアナは、ふとキラの方を向く。

キラは未だに空を見上げていたが、ふと人差し指と中指を立てた手を空に掲げる。

キラの掲げた細い指に、一羽の小鳥が舞い降りる。

「フツ……」

その光景でキラの頭に思い浮かぶのは、幼い頃に親友が別れの際にくれた小さな友達。

(アスラン……。トリイ……)

微笑みながら小鳥の羽を指先で撫でると、FW陣がキラに近付いて

きた。

「わあ〜……………」

キラさん凄〜い……………」

「野生の鳥をどつちやって呼び寄せたんですか?」

「キユクルー!」

「ちよ、フリード!?!」

キャラの使役龍のフリードも、小鳥に呼応するかの様にキラの頭に飛び乗る。

「フ、フリード!

今すぐ降りて!…!」

「キユルー!」

キャラが何とか背伸びをしたりジャンプをしながらキラの頭の上にいるフリードを降ろそうとするが、全く届かない為にフリードは頭の上で丸まってしまった。

何というか、主であるキャラよりキラに懐いてしまっている。

「良いよ。キャラ」

「ふう……………。フリードお……………」

とうとう半ベソをかいてしまうキャラに、キラはキャラの頭を軽く

撫でて慰める。

もう何度もやった光景である。

その時、一台の車が六課メンバーに近付いてきた。

フロントガラスから見えるサングラスをかけているが橙がかった金髪
の長い髪と白い肌から、女性だというのが解る。

そして、女性が車から降りてサングラスを外すと、なのはとフェイトに
駆け寄ってきた。

「なのは！フェイト！」

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

二人の反応を見る限り、どうやら幼馴染みか知り合いの様だ。

キラはいつの間にか大人しくなったフリードをゆっくりキャロに返すと、
その様子をシミジミと見る。

「久しぶり！」

で、後ろにいるのは誰なの？」

「うん。」

私達の教え子と協力者だよ。

協力者は軍人でかなりの高官だから、ああいう格好だけど」

「ぐ、軍人で高官！？

とてもそうは見えないわよ？

寧ろかなり面倒見が良いお兄ちゃんに見えるわ」

ごもつともな意見である。

スルーをしていたキラだったが、ちょっと気になったので小鳥を逃がすと、クルツとなのは達の方を向き、ブーツを鳴らしながら近づく。

「キラ・ヤマト、といます」

「アリサ・バニングスよ。

よろしくね。

それと、私の事はアリサで良いわ。皆そう呼んでるし。

そこの教え子さん達もよ」

「「「「はい「「「「

「解りました。

じゃあ僕もキラでよろしくお願いします」

「解ったわ。キラ」

速くも仲良くなった二人だが、後ろで白い悪……もとい冥お……もとい不屈のエース・オブ・エースと金色の死が……もとい魔王のよ……もとい金色の閃光がちょっとムスツとしていたのに気付いていない。

「ああ、思ったけどキラは今何歳なの？

軍人でかなりの高官って聞いたけど」

「え？19歳ですが……？」

ピシッ！！

年齢を言った瞬間、世界が凍り付いた。

そりゃあもう、エターナルコフィンもかくやという程に。

「じゅっ、19歳!？」

私達と同じ年じゃない!」

「そうだよ!

キラ君19歳でそんな高官にいるなんて聞いてないよ!」

「ず、狡いよ!

何で今まで黙ってたの!？」

隊長陣から口々に文句を言う始末。

FW陣はポカーンとしていたりしているが、今のキラにはそれを気にかける余裕が無い。

キラは嫌そうな顔をしながら僅かに退く。

これは言わなかったマスターが悪いです

ついには”フリーダム”からも注意されてしまった。

いたたまれない気持ちになったキヲは僅かながら興味に負けて来た事を後悔した。

旧友との再会と邂逅

その後暫く経ち、漸く落ち着いたアリサは、目を擦りながら再びキヲを見る。

「本当、見た目はかなり優しそうなお兄ちゃんなのに軍人さんでかなりの高官だというのは言ってみないと解らないわね……」

「あ、はは……はあ」

「あ、それと私には敬語使わなくて良いわ。堅っ苦しいの苦手なのよ」

「え？」

今この女性は何と言った？

会ったばかりの男に何と言った？

名前で呼んでも良い上に、敬語無しとは、もうすでに知り合いの域を越えて友達になっているようだ。

現になのはとフェイトはポカーン（大体こんな顔）（）としてゐる。

「え、でも会ったばかりの人にそこまで……」

「拒否権はあるとも思ってるの？」

「……………」

キラは、もう本当に興味に負けて地球に来た事を悔やんできた。

だが後悔しても何も始まらないし、過ぎ去りし過去はもう二度と戻って来ない。

もうこうなった以上、前に行かないとダメだ。

「はあ、解りました……、じゃなくて解ったよ。アリサ。これで良い？」

「ええ！良いわよ。改めてよろしくね、キラ！」

速くも友達になっただが、いつ別れが来るかは解らぬものそれはそれで良いのかも知れない。

人生とは一期一会。

出会いと別れのオンパレードであり、またそれは人を成長させるもの。

だが、それを黙って見てない人がいる訳で。

「ず、狡いよ！アリサちゃん！」

キラ君は私達には敬語とさん付けなのに！！！」

「キラこそ何でアリサにはそんなに親しくいられるの！？」

お姉ちゃん悲しくなってきたよ！！！」

「嫌、だってなのはさん達は今までにさん付けと敬語でしたけど、

こっちはこっちなり親しげにやっていますよ。
だけどフェイトさん。
僕は貴女の弟ではありません!」

案の定、なのはとフェイトがブーブー文句を言ってきたが、キラは冷静にツッコミを返す。

因みにキラはフェイトの弟になったつもりは無い。

「もうこうなったらキラ君!

私達の事も敬語じゃなくて

」

「どうしたんや?

なのはちゃん。フェイトちゃん。そないに大声立てて」

いつの間にかやって来たもう一台の車から、はやととシグナム、シヤマルと紫色の髪にウェーブがかかった女性が降りてきた。

何とも狙った様なタイミングだったので、キラはホツとしながら完全に取り残されたティアナ達FW陣の方に寄る。

「久しぶりの故郷だからって、少し羽を伸ばし過ぎじゃないですか? 任務というの、忘れてないか心配ですよ」

「まあまあ。ティア

久しぶりなんだから良いじゃん」

「そうだよティアナ。

久しぶりの故郷だから、そうなるのは自然だよ」

「そつでしよつか？」

「うん」

何の気も無しに話していれば、紫色のウェーブの髪をした女性がキラに近付いてきた。

「初めまして。私は月村　　すずかと言います」

「キラ・ヤマトと言います」

ニッコリと微笑みながらぺこりと頭を下げて挨拶をするすずかに、キラも儂げな笑みを浮かべて軽く頭を下げて自己紹介をする。

「あ、私の事はすずかで良いし、敬語も無しで良いよ？」

「え？まあ、うん。解ったよ。すずか」

「うん！」

性格はアリサとは裏表の様に違えども、どうやら根本的な所は同じの様だ。

後ろでムスツとしている隊長陣は軽くスルーを決め込んでいるが。

「まあ、取り敢えず仕事をしましょうか。
はやてさん」

「……………でや……………」

「はやてさん？」

「何でや!？」

何でアリサちゃんとすずかちゃんにはそんな親しげなのに私等には敬語とさん付けなん!？」

差別やないの、そんなん!！」

はやて暴走。

そしてそれに便乗するのはとフェイト。

「そうだよ！」

何で会って間もないアリサちゃんやすずかちゃんにはそんなに仲良しになれて私達には他人行儀なの!？」

「なのはとはやてに同じ！」

何で何で!？」

ズイスイツとキラに詰め寄る三人。まあ、この三人は自分と同一年の人間からこんなに他人行儀に接されるのが嫌いなだから、仕方ないだろう。

それも自分達を助けてくれた上に友達と誤っているような人物からそうされては嫌だろう。

キラはFW陣やアリサ、すずか、そして”フリーダム”に要救助の視線を向けるが、皆目を逸らされ、無視されてしまった為に、なのは、はやて、フェイトにも同じ様に親しげに喋る事になった。

暫く経って

「そういえば、せっかく来たからさ。

翠屋でバーベキューでもしない？

生徒さんやキラ、土郎さんと桃子さんとかも交えてさ」

唐突に、アリサが提案してきた。

アリサが言うには、このコテージでバーベキューをするのも良いかも知れないが如何せん、ここにはバーベキューセットが無いらしく、しかもせっかく来たからには、なのはは両親にも挨拶をした方が良いという事だ。

皆が一様に頷く中、キラとFW陣はその翠屋という所や土郎や桃子という人物を知らない為、首を傾げていたが。

「なのは。翠屋と土郎さん、桃子さんって？」

「ああ、キラ君とFWの皆は知らなかったね。

翠屋っていうのは私、高町家が営む喫茶店で、二人は私の両親だよ」

「そう」

ふむ、と頷くキラ。

何故かは知らないが、キラの背中に何か冷たいのが流れたが、キラ

はそれを黙っておいた。

「じゃあ、皆。」

これから翠屋に行くから車に乗って」

「「「はい！！（うん！）」「「「」

FW陣、隊長陣共に頷いて車に乗ろうとするが、問題が発生。

「ちよつと待って。」

全員乗れない」

そう。二人が乗ってきた車は少し大きめな車であるが、それでも余り多くの人間は乗れない。

今ここにいるのはアリサとすずかを除いてFW陣四人に隊長陣三人、ヴォルケンリッターの内二人、そしてキラ。

結論、一人入らない。

「確かに……。どうする？」

「うん……。」

FWの皆とキラ君はこの地形には慣れてないし……。だからといってはやてちゃん達を歩かせる訳には行かないし……」

うーんと考える機動六課メンバーだが、答は以外な所からやって来た。た。

「あ、じゃあ僕は後でタクシーなりバスなり何なり使って来ます」

その場所というのは、キラである。

「え、キラ!？」

「そんな、キラ君この場所解るの!？」

「地図を見れば大体は解る」

「バスやタクシーの場所は解るの？」

「歩いていれば大丈夫」

「翠屋はここからかなり遠いんだよ？」

「体力には自信はある」

「道に迷うかも知れへんよ？」

「ノープロブレム」

「お金の方は良いの？」

「使わなければ問題無し」

隊長陣三人とアリサとすすかが心配するが、キラは一步も退かずに頑として譲らない。

決めたら決めただ絶対譲らないのがキラの性格だ。

それは良く言えば直情だが、悪く言えばただの物凄い頑固だ。

「はあ……。
解った。

「じゃあキラは後から来てね。バス代あげるから」

「アリサがため息をつくと共に、財布から二千円程度のお金を、車から一枚の地図を出してキラに渡した。

「アリサ？」

「良いから使つて。

「私ん家は会社経営だから、これくらいの損失は安いもんよ」

「でも……！」

「拒否権無し！」

「良いから使いなさい!!」

「……………はい」

「アリサの出す剣幕に負けて、やれやれという雰囲気を出し、キラは額くとアリサから地図を手に取って二千円程のお金ズボンのポケットに入れる。」

「じゃあ、キラ君。

「私達は先に行ってるよ」

「うん」

「ブロロロ……………」

さすがが言ってキラが頷くと同時に二台の車が動き出し、キラの視界から少しずつ小さくなって行き、消えた。

「さて……………」。

”フリーダム”、セフトアップ」

「了解」

暫く経って極限にまで上げられた視覚と聴覚から二台の車の音が消えたのを確認し、キラは”フリーダム”のバリアジャケット、VPSを展開し、アリサから貰った地図を広げる。

「喫茶翠屋は……………ここからかなり離れてるな……………」

「確かにかなり離れますね……………」。

だからといって下手に速く行けば怪しまれますし、それに魔力反応も特定されます」

「うん……………」。

今はなのは達とはかなり離れてるから大丈夫だけど……………」。

「そうだ」

何か思い付いたのか、思案に耽っていたキラの表情が明るくなる。

「”フリーダム”、『あれ』出来る？」

「成る程……………」。

『あれ』ですね。

「了解しました」

一方、すずかの車内では……。

運転席には主であるすずか、助手席にはなのは、後部座席にFW陣が座っていた。

前述の通り、アリサとすずかの乗ってきた車は普通の車と比べて少し大きめなのでこれくらいは普通に乘れたりする。

「なのはちゃん。フェイトちゃん。生徒の皆さん。

キラ君って軍人なの？」

「え？」

「まあ、うん」

頷く隊長陣。

「ティア。

確か、キラさんは座布団軍の隊長だったよね？」

「キラさんの軍隊は座布団軍じゃなくてザフト軍よ。何微妙な所で間違えてんのよ」

早速ボケるスバルに、鋭いツツコミを入れるティアナ。

「あはは……。」

エリオ君。キラさんは自己紹介の時に最高評議会議長直属の特務隊所属って言ってたよね？」

「うん。」

それと、部隊の隊長と兼任してるって言ってたよ」

スターズのコントを華麗なスルーをして年少組の二人が確認。

これではもう本当に誰が年上なのかが解らない。

「へえ〜。」

座布団軍の特務隊所属か〜。

で最高評議会議長ってどんな人で、特務隊ってどんな権限持ってるの？」

「す、すずかちゃん。」

座布団軍じゃなくてザフトだからね？」

スバルと同じボケをぶちかましたすずかに、なのはが苦笑しながらツツコミを入れる。

「確か、キラ君が言ってたのでは最高評議会議長っていうのはキラ君が住んでる国の国家元首、つまり王様。」

キラ君は、まあ例えるなら王様直属の騎士、かな？」

「確か、その特務隊に着任出来るのは、国防委員会及びその最高評議会議長に戦績、人格共に認められた極々一部の軍人で、着任され

た人は個々において行動の自由を持ち、その権限はザフトの通常の部隊指揮官よりも上位で作戦の立案及び実行の命令権限までも有している、でしたよね？」

「そんなトンデモな権限を持つてるなんて……。」

凄い高官なんだね。

キラ君って……。」

他に事情を聞いた者がいるならばそれを言うならばはやて達も、と言うだろうが今この場でそれを言える程の人物はいない。

「そういえばさ。」

キラ君は隊長って言ってたけどなのはちゃんや生徒さん達みたいにデバイスを駆使して戦うの？

制服から見れば管理局じゃないのは解るけど」

「ううん。」

キラ君には魔力は無いよ。

だけど、キラ君はこれで戦うの。

すずかちゃん。ちよっと車止めて」

「え？うん」

なのはに言われると、すずかはちょうど近くにあったパーキングエリアに車を止める。

「レイジングハート」

「了か……マスター！

6時の方角、距離500メートルに魔力反応……あれ？」

「……………どうしたの？
レイジングハート？」

「いえ。」

今さっき、ミスターヤマトの元に誰のものでもない魔力反応が検出されました」

レイジングハートからの情報により、その空間に緊張が走る。

「で、その魔力反応とキラ君は今はどうなって？」

「魔力反応の方はロストしました。」

ミスターヤマトの方は生命反応があり、こっちに歩く速度で動いてます」

キラの無事に、皆胸を撫で下ろす。

今ここで次元漂流者を元の世界に帰さぬまま死なせてしまつては、元も子も無い。

しかも、死んでしまえばあの魔法が通用しない人型機動兵器モビルスーツにどう立ち向かえるのかという対策が無くなる。

「そう。良かった。」

レイジングハート、写真を「

「了解」

持ち主からの命令により、すずかの目の前に”ストライクフリーダ

ム”が威風堂々としている姿が映る。

全長や全体重量等が、その写真のすぐ傍に映る。

「凄〜い……」。

大天使みただけで、何か兵器みたい……」

「うん。」

実際質量兵器だけど、キラ君の場合は特別な。

今は諸事情があつて生身だけだね」

「へえ〜」

一応驚嘆の声を上げるすずかだが、写真が消えるとすぐにまた運転を始めた。

一方、アリサの車にも同じ様な質疑応答が繰り広げられていた。

因みに席順は、運転席にアリサ、助手席にはやて、後部席にヴォルケンリッターとフェイトである。

「ほあ〜」。

キラってそんな兵器で戦ってるんだ」

「せや。」

キラ君がこれに乗って戦うんはかなり凄いや。
もう普段とは比べものにならない位華麗な戦い方なんや」

「へえ。で、はやて」

頷くと同時に、アリサが後ろに聞こえない位の声で聞く。

「何や？」

「何でフェイトはあんな表情をしてるの？」

そう。アリサが言う通り、フェイトはずっと複雑な表情をしながら窓の外を見ているのだ。

何か一つの事をずっと悩んでいる、そのフェイトの表情で何かを感じ取ったのだ。

それを読み取ったはやては、僅かに苦笑するとアリサと同じ様に事情を話す。

「うん。」

実はな、キラ君が保護されたばかりの時に、キラ君と喧嘩したんよ」

「キラとフェイトが喧嘩？」

「せや。」

シグナムから聞いた話やと、何かキラ君がフェイトちゃんにFW陣の内の年少組を何故戦わせとる？」

と聞いた時にフェイトちゃんがどうやら間違えて理解してしまったらしいよ。

で、それでキラ君がかんかんに怒って喧嘩、という訳や。

けどキラ君何で怒ったんやろ？あの二人も人並みに戦えるのに」

はやてが疑問に満ちた声で言うが、アリサは正直キラが言った事を大方理解していた。

F W陣の内の年少組はエリオとキヤロ。

幼い頃に、母親から捨てられたフェイト。

異世界の軍人であり、また部隊全員の命を背負う者であるキラ。

それから考えると、答は自ずから割り出せる。

（はやて。

あんた、部隊長として一体何を何として見てたの？

これならあんたの席の部隊長の席はキラが引き継いだ方が断然良いわよ）

はあ、と内心ため息を吐きなくなったアリサだが、それは一切顔に出す事は無かった。

時間が少し遡った、コテージ。

キラは”フリーダム”のバリアジャケットとVPSを展開したまま地図とにらめっこしていた。

彼が見ているのは、翠屋の場所ではなく、何処が目立ち何処が目立たない場所か、である。ふと、キラは全て覚えたのか地図を畳んで片手に持つ。

「フリーダム”。

『あれ』お願い」

「了解」

”フリーダム”からの了承が聞こえると同時に、キラの姿がその場から掻き消える様に消えた。

嫌、実際そこにいるままなのだが、周りからキラの姿が消えたのだ。肉眼のみならず、レーダーにも。

『あれ』とはGAT-Xシリーズの一つである”ブリッツガンダム”とシンが操る”デステイニーガンダム”のウィング、そして三年前にザフトが使用した禁断の超兵器”ジェネシス”に搭載されていたステルス能力”ミラージュコロイド”である。

”ミラージュコロイド”

可視光線を歪め、レーダー波を吸収するガス状の物質で、これを磁

気で機体周囲に纏う事で視覚的、または電波的にも自機の存在を隠匿する事が出来る特殊兵装。

だがこれを展開すると、VPSやPSが自動的に解除されるので防御力が著しく低下する諸刃の剣の兵装だ。

”デステイニー”の場合はそれと”ヴォワチュール・リュミエール”を組み合わせ、幾重もの残像を出して翻弄出来る為に弱点は殆ど存在しないが。

バッテリー型の機体（”ブリッツ”系統の機体）では連続で最高8分の使用制限があるが、核エネルギー型の機体では無制限となっている。

因みに今キラが纏った”ミラージコロイド”は、自身の魔力と”フリーダム”の魔力をハイブリットさせて、バッテリーの代わりとしている為に前者の方であり、またVPSを解除しないという弱点が改善されている。

「よし、行くよ」

「はい」

一時的だが、如何なるものにも見えない不可視の鎧をその身に纏った大天使は、大空に舞い上がり、ある場所を目指す。

合流地点であり、なのはの実家でもある翠屋へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242v/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 天空を舞う自由の大天使

2011年11月20日19時31分発行